

---

# 赤髪のディアナ【完結】（ガンダムseed再構成）

かーき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤髪のディアナ【完結】（ガンダムseed再構成）

### 【Nコード】

N84330

### 【作者名】

かーき

### 【あらすじ】

この話はルナマリアが主人公です。しかし、初期設定にかなりの改変があります。

ルナマリアはユーラシアに生まれ、エイプリルフル・クライシスでナチュラル

の祖父母を亡くし、迫害を逃れてオーブに亡命してきます。

年齢もサイと同年齢です。

と言うようにかなり改変がありますが、読んで楽しんでいただけ

ら光栄です。

\*この作品は以前2chに投稿した物です。

arcadiaさんにも同時投稿させていただいております。

## いつもの朝

……

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。ちょっとおいつまで寝てるのよ」

誰かが枕元であたしを呼んでる。

「お姉ちゃんてば。起きて」

あたしの意識は、かなり暴力的に現実世界へ引き戻されつつあった。目をあける。うー、かつたるい。

「おはよ、メイリン」

「お父さんもお母さんも、もう会社行っちゃったわよ。ご飯できてる」

「メイリンが作ったの？」

「うん」

この娘、絶対いいお嫁さんになるわ。そう思いながらあたしは服を着替え始めた。

あたしの名前はルナマリア・ホーク。メイリンはあたしの妹。あたしたちの一家は、地球連合とプラントの戦争がはじまり、コーディネーターへの差別が激しくなったユーラシア連邦からオーブに亡命してきた。

優先的に亡命できたのが両親がコーディネーターとして身に着けた優れた能力を持っていたからだったのは、ある意味皮肉だと思う。

「はい、紅茶。トーストはバターとブルーベリージャムね。卵は半

熟になつてると思う」

「ありがと。メイリンはコーヒーだけ？」

「うん、朝はお腹がすかなくて」

メイリンはそう言いながら自分用に黒豆コーヒーを入れる。

「あ、お姉ちゃん、そんなにジャム付けて。太るわよー」

「いいのよ。まだ美容体重より痩せてるんだから」

「ウエストだけ太っても知らないから」

あ、この間あたしのスカート穿けなかったのまだ気にしてるー。これ以上この話題には触れない方がいいな。

そそくさと朝食を食べ終わると、あたしたちは何時ものように通っているカレッジのゼミに向かった。

「おはようー！ルナ、メイリン」

「おはようー！キラ」

「おはようございまーす！」

東屋に座ってノートパソコンをいじりながらあたしたちに声をかけてきたのはキラ・ヤマト。

カレッジの同級生で同じゼミだ。メイリンもプログラミングの腕いいけど、キラはカレッジーじゃないかと思ってる。

おとなしくて優しい、なんとなく、ほっとけなく感じる弟みたいな奴だ。

キラのノートパソコンから、ナレーターが緊迫した様子でしゃべっている声が聞こえてくる。

「なーに？なにか新しいニュース？」

「うん、カオシユンが落ちそうだ」

「うう、先週でこれじゃあ今頃はもう落ちちゃってるかもね、カオシユン」

「うん…」

「お姉ちゃん、カオシユンなんてオーブ本土からけっこう近いじゃない。大丈夫かなほんと」

「うーん。心配ないんじゃないかな。近いと言ってもオーブは中立だよ。オーブが戦場になるなんてことはまずないって」

「そうよ、メイリン。それにここはただの居住コロニーだし」

「キラー！こんなところに居たのかよ、カトー教授がお前のこと探してたぜ」

振り向くと、トールとミリアリアがいた。二人とも同級生だ。いつも仲がいいなあ。

「えー！？またー！？」

「見かけたらすぐ引っ張ってこいって。また何か手伝わされてるの？」

「ったく。昨日渡されたのだからまだ終わってないのに。しょうがないな」

キラはしぶしぶノートパソコンを閉じると立ち上がった。

「じゃあ、行こうか」

「うん」

## 崩れる日常

「だからー、そういうんじゃないんだってばー」

「えー、うつそー!」

「もう、白状しちゃいなさいよー」

カトー教授のラボに向かっていると、前から明るい声が聞こえてきた。

後輩のフレイとその友達が話してる。

フレイは、同性のあたしから見ても明るい栗色の髪を長く伸ばして、女の子していてきれいだな、と思う。

あたしも伸ばそうと思ったことが何度かあるけど手入れが面倒になつて挫折した……

「うふふっ。あら？ミリアリア」

「はい、フレイ」

「あ、ねえ、ミリアリアなら知ってるんじゃない？」

フレイの友達がミリアリアに話しかけた。なんだろう？

「なに？」

「やめてよつてばもうー!」

「この子ったら、サイ・アーガイルに手紙貰ったのー!なのに何でもないって話してくれないのよ。ねー?」

「えー!?」「えー!?!」

キラも驚いてる。なんかキラってフレイに憧れてるみたいなのよね。でも、そのショック受けた顔、驚きすぎじゃない?ちょっと悔しい。

「あんだ達っ！もういい加減にっ！」  
「ん、んん」

咳払いが聞こえた。見たら、男を二人引き連れて、サングラスをか  
けた女の人が立っていた。

「乗らないのなら先によろしい？」

「あっあーすいません。どうぞ」

気が付けばあたしたちでエレカー乗り場の場所を塞いじゃってた。  
失敗失敗。

その女の人たちはあたしたちがどくと、さっとエレカーに乗り込ん  
で去っていった。

「っもう！知らないから！行くわよ！」

「ああん、待ってよフレイー」

フレイたちもエレカーに乗り込んで去っていった。

「意外だなあ、フレイ・アルスターとは。けど強敵だよーこれは。

キラ・ヤマト君ー」

「僕は別にっ」

キラをからかいながら、エレカーに乗り込み、しばらくしてカトー  
ゼミに着くと、ひょいとゼミの先輩のサイが顔を出した。

「あ、キラやっとな来たか」

「うん。ん？」

キラの視線の先を見ると、金髪の帽子を被った少年がいた。

「だーれ？あの子」

「あ、教授のお客さん。ここで待ってるって言われたんだって」

小声でゼミの仲間のカズイに聞くと、そう教えてくれた。

向こうではキラがサイから何か受け取ってる。うへーとか言ってるから、教授からの新しい頼まれごとだろう。

教授にも困ったもんだ。

そつえば！あたしはキラに近づいて小声で話しかけた。

「ねえねえ、そんなことより手紙のこと聞いちゃえば？」

「うわあ」

「手紙？」

あ、サイに聞こえちゃった。てへ。

「なんでもない！なんでもないったら！」

「なんでもなくないよなー」

ツールもにやにやしてからかいに混じる。

そんなこんなであたしたちはゼミのいつもの活動を始めた。

メイリンはキラの手伝いをする。あたしの仕事はパワードスーツ（着るロボットみたいなものね）を動かすことだ。

父がこの系統の技術者で、作業用ロボットなんかよく操縦させてもらってるから、ゼミの中では一番操縦がうまいと思う。うん！

……

グラグラ！

「キヤー！」

いきなり地面が揺れた。地震！？いや、ここはコロニーだ。そんなものある訳ない！じゃあ、なに！？事故！？

照明も消えた中、みんなで非常口を目指した。

部屋を出ると、職員の人たちもぞくぞくと階段を上がって避難していた。

「いったい、どうしたんです！？」

「知らんよ」

「ザフトに攻撃されてるんだ！コロニーにモビルスーツが入ってきてるんだよ！」

「……え！？」「……」

「君達も早く！」

なんで！？なんで中立のコロニーが！？そんな、攻撃なんて……混乱するあたしたちをサイが叱咤した。

「僕たちも行こう！早く！行くぞ！」

「うん！」

「あ、君！」

え？金髪の子、教授のお客さんが、非常口とは別の方に走り出した。キラはその子を追いかけ始めた。

「キラ！」

「すぐに戻るよ！」

しょうがないな。ほっとけなく感じてあたしも後を追いかけた。

「何してるんだよ！そっち行ったって……」

「何で付いてくる？そっちこそ早く逃げろ！」

「お姉ちゃん！」

え？メイリンまで着いてきちゃったの？

「きゃー！」

その時近くで爆発が起こって金髪の子の帽子が吹き飛ばされた。

「あ……女……の子？」

キラが呆けた声でつぶやく。あたしも呆けてその娘を見つめてた。いやー。女の子だとは思わなかったわ。

「なんだと思ってたんだ！今まで」

「いや、その、ごめん」

「あー、ごめんねー」

なんか、あたしまで釣られて何も言っていないのに謝ってしまった。

「いいから行け！私には確かめねばならぬことがある！」

「行けったってどこへ？もう戻れないよ！」

「……」

どうしたのか、金髪の娘はうつむいて何かつぶやいていた。だいじょうぶかな？

キラが、金髪の娘の手を握って走り出した。

「みんな、着いてきて！大丈夫だって。助かるから！工場区に行け

「はまだ避難シェルターがある！」

走って走って。大きな空間に出た時、下に大きなロボットが横たわっていた。

え！？あれってまさかMS！？なんでここに！？

「こ、これって……」

「はあ……やっぱり……地球軍の新型機動兵器……うっ……お父様の裏切り者ー！」

チーン！

ラッタルが甲高い金属音を立てた。

金髪の娘の叫び声に気づいて、下から兵士が撃ってきた！

「やばいよキラ！逃げよう！」

「ああ！」

あたしたちは再び安全な場所を探して走り出した。

「はあはあ……やっと見つけたー」

「ほら、ここに避難してる人が居る」

「まだ誰か居るのか？」

中の人が声をかけてきた。

「はい。僕と友達が3人です。お願いできますか？」

「四人！？」

「はい！」

「もうここはいっぱいなんだ！左ブロックに37シェルターがある

「からそこまでは行けんか？」

「なら3人だけでもお願いできませんか！？女の子なんです！」

「……すまん、なんとか後二人が限界だ！」

「……わかりました。メイリンとあなた、入って！」

「お姉ちゃん！」

「あたしとキラは向こうへ行くから！大丈夫だから、早く！」

あたしはメイリンと金髪の娘をシエルターに押し込んだ。

キラと目を合わせると、再びあたしたちは走り出した。

さつき銃撃された所を通らなきゃいけない。嫌だなー。

「あ！？危ない後ろ！」

オレンジの作業着の女性が撃たれそうになってたけど、キラが声をかけたので難を逃れたようだ。

その女性があたしたちに声をかけてきた。

「来い！」

「左ブロックのシエルターに行きます！お構いなく！」

「あそこはもうドアしかない！」

「え！？うわあ！」

また爆発が起こった！

「こっちへ！」

「しょうがないみたいね」

「ああ」

爆発をやりすごして、キラとうなづきあうと、MS目指してラッタ

ルから飛び降りた！

あ、あの人が撃たれた！

あわてて駆け寄ると、ザフトの兵士がナイフを持ってこっちに来るのが見えた。怖い！あたしこんなところで死にたくない！

「アス、ラン！？」

「っ！？キラ！？」

え、知り合いなの？

作業着の女性が銃を向けると、その人は後ろに下がっていった。

その人はいきなりあたしたちをMSのコクピットに落とすと、MSを起動させた。

「シートの後ろに！この機体だけでも。私にだって動かすくらい」  
「……ガン、ダム？」

表示される画面に表示される文字が縦読みでそう見えた。

そして、スクリーンにパツと周囲の光景が映し出され、このMSは立ち上がったのだ。

## 初陣

ガシャン！ガシャン！

……MSは動いてる。歩いてるよ。だけど、すぐくぎこちない。まるであたしが初めて作業用ロボット操縦した時みたいだ。

「私はマリュー・ラミアス。地球連合軍の大尉よ。あなたたち、巻き込んですまなかつたわね」

そう言いながら、あたしたちをMSに押し込んだ女性　マリューさんは、あちこちいじってスクリーンを切り替えたりしてた。

「あ！サイ！トル！カズイ！」

「みんな！」

スクリーンのある部分がアップになると、みんなが写ってた。まだ避難し終わってなかったんだ！

ガガガガ！

「うわあ！」

「下がってなさい！死にたいの！？」

突然ザフトのMSから銃撃を受けた！ユーラシアでコーディネーターだからって追われてた時の事が頭をよぎる。

このままじゃ……何か武器とかないの！？このMS！？

ザフトのMSは剣を抜くと切りつけてきた！やられるかも！？あ、マリューさんが何かボタンを押した！

ガシューーン！

衝撃はあったけど、このMSはやられていなかった！

「すごいよね！このMSの装甲！」

……安心したのは早かった。ザフトのMSは何度も剣を叩きつけてきて、とうとうこのMSは倒れてしまったのだ！

剣の先が迫ってくる！

あたしは思わず体が動いて、MSを動かしてた！

なんとかMSを剣先から逸らして相手を弾き飛ばす事に成功した。ふー。

「ちよつとあなた!?!」

「ここにはまだ人が居るんです！こんなものに乗ってるんだったら何とかして下さい！」

「無茶苦茶だ！こんなOSでこれだけの機体を動かさうなんて！」

キラはキラで、勝手にこのMSのOSをチェックしはじめていた。

「まだ全て終わってないのよ。仕方ないでしょ！」

あたしは覚悟を決めた。

「どいてください！キラはOSを直せるなら直して！」

「わかった！」

「ちよ、ちよつとなにをあつえs r d f t g yふじじ」

マリューさんを力づくで持ち上げてシートの後ろに押しやると、あ

たしはシートに座った。

キーボードを取り出すとキラに渡した。キラはぶつぶつ言いながらすごい勢いでタイピングを始めた。

「いい感じよ！キラ！武器とかはないの？」

あたしは秒単位で良くなるMSの動きで、相手の動きを邪魔し続けることに成功していた。でも、このままじゃ埒があかない。

「武器…アーマーシユナイダー…？これだけか？頭についてる銃とナイフみたいなもんしかない！今左右の腰から出す！」

二つのナイフ…：なら！目潰しは護身術の基本よね！あたしは立ち上がりかけた相手の頭目掛けて力をこめてナイフを投擲した。

ザシユー！

ナイフは見事に相手のカメラ・アイに突き立った。

「うああああー！ー！」

あたしは一気に相手に組み付き、頭上に持ち上げて地面に思い切り叩き付けた！そして残ったナイフを腕の付け根に突き刺した…：…？相手がまったく動かない。もしかして、倒した、のかな？

「マリユーさん、相手のMS、外側からのハッチの開け方わかります？」

「…あ、ええ、たぶん…！」

「キラ、お願い！見てきて」

「わかった！」

……相手のパイロットは気絶していた。あたしたちは彼を武装解除し、嚴重に縛り上げた。

あたしたちはとりあえず生き残ることに成功したのだ。

……気が付いたら、マリユーさんも気絶していたけど。

## 軋轢

「うづつ！」

「気が付きました？ルナー！マリユールさんが付いたよ！」

あ、マリユールさんが付いたんだ！

「うづつ！」

「あー、まだ動かない方がいいですよ。すみませんでした。なんか、無茶苦茶やっちゃって。お水、要ります？」

「ありがとう」

水筒から水を飲んでたマリユールさんだけど、カズイたちがあたしたちが乗ってたMSを覗いたりしているのを見ると、いきなり形相が変わって拳銃を撃った！？

キラがあわてて駆けつけて来た。

「何をするんです！止めて下さい！彼らなんですよ！気絶してる貴方を降ろしてくれたのは！」

「その機体から離れなさい！助けてもらったことは感謝します。でもあれは軍の重要機密よ。民間人が無闇に触れていいものではないわ」

「なんだよ。さっき操縦してたのはルナじゃんか」

マリユールさんはなおさら怖い顔をしてツールに銃を突きつけ、みんなを並ばせて名前を言わせた。

なんなのこの人！恩知らず！

「申し訳ないけど、あなた達をこのまま解散させるわけにはいかな

くなりました。事情はどうあれ軍の重要機密を見てしまったあなたは、然るべき所と連絡が取れ処置が決定するまで、私と行動を共にしていただくがざるを得ません」

「そんな！ 冗談じゃねえよ！なんだよそりゃ！」

「僕たちはヘリオポリスの民間人ですよ？中立です！軍とかなんかそんなの、なんの関係もないんです！」

「そうだよ！大体なんて地球軍がヘリオポリスに居る訳さ！そっからしておかしいじゃねえかよ！」

「そうだよ！だからこんなことになっただんだけだろ！？」

バキューン！

騒ぎ出したあたしたちを恫喝するように、マリューさんはまた拳銃をぶっ放してヒステリックにわめき続けた。

「黙りなさい！何も知らない子供が！中立だと関係ないと言ってさえいれば、今でもまだ無関係でいられる。まさか本当にそう思っている訳じゃないでしょう？ここに地球軍の重要機密があり、あなた達はそれを見た。それが今のあなた達の現実です」

「……そんな乱暴な」

「乱暴でもなんでも、戦争をしているんです！プラントと地球、コーディネイターとナチュラル、あなた方の外の世界はね！」

またか……この女の言うことを聞いてる内に心が冷えて行くのがわかる。コーディネイターコーディネイターってユーラシアの奴らみたいに。しょせん地球連合か。なんでほって置いてくれないの！あたしは目を閉じながらふらつと地面に倒れこんだ……

……

「ナンバー5のトレーラー……あれでいいんですよ？」

「ええそう……ありがとう」

「それで？この後は僕たちはどうすればいいんです？」

「ストライカーパックを……そしたら……キラ君も一回通信をやってみて！」

「……はい」

あの後みんな、あの女の指示に従って色々やってる。もちろん嫌々だけ。

あたしだけは、さっきの戦闘で疲れが出たんだろつと言っ事でベンチに寝かされている。でもね、隙を伺ってたのよ。

あの女の拳銃がホルスターに収まっているのを確認すると、一気に後ろから羽交い絞めにして左手で拳銃を奪い取った！

「うぐう」

傷を締め付けられてか、うめき声をあげるけどそんなの知らない。

「ルナ！」

「形勢逆転ってね！さっきは好き放題言ってくれたわね！中立なんか知ったこっちゃないって？国際法ってどこに行ったのかしらね？戦争をしているのがプラントと地球？笑わせないでよ！プラントと地球連合が戦争してるだけで中立国いっぱいあるじゃない！」

「コーデイネイターとナチュラルが戦争をしている？どこが？プラントにもナチュラルいるじゃない！地球にもコーデイネイターいるじゃない！人種間戦争にでもしたいの！？」

「そうそう、あたし、コーデイネイターなのよね。あなたはナチュラルでしょ？敵だと言われたも同然よね？」

「敵ならこの拳銃撃っちゃってもいいかしら？人に銃向けるなら、撃たれる覚悟はできてるよね！？」

「おーい！ルナちゃん！マリユ一大尉！」

緊迫した雰囲気の中、男の人がこちらへ向かってきた。

あれは……確かお父さんやお母さんと同じ会社のアスカさん！

「アスカさんですよね！？父や母は無事ですか！？」

「ああ、もう避難しているはずだ。にしても、えらく物騒な光景じゃないか？」

あたしは、警戒を解かずにマリユ一大尉に拳銃を突きつけたまま、これまでの事を話した。

「マリユ一大尉、ルナちゃんが言ったことは本当かい？」

「え、ええ、確かに銃で脅迫しましたし、彼女が言ったことに類することは言いました。でも……！」

アスカさんは厳しい顔になると

「それは受け入れられない発言だな。そもそも我々がここで秘密裏にMSを開発していたのは中立コロニーと言う利点を考えての事だろう。私もコーデイネイターなんだが、そんな目で君に見られていたとは悲しいよ」

そう言つて、悲しそうな表情を浮かべた。

「すみません！もちろんアスカ主任をそんな目でなんか見ていません！機密の保持に気が行き過ぎて、その、言葉の使い方間違えました……」

「ああ。さあ、学生諸君にきちんと謝りなさい。ルナちゃんも、も

うそんな危ない物はしまっておきなさい。」

あたしが銃を突きつけるのをやめると、マリユール大尉はぺこぺこことあたたちに謝ってまわった。

「……でもアスカ主任、このままではせっかくここまで完成させたMSが。ザフトがまたこれを狙って攻撃してくるのはまず間違いないと思われます！」

「うーん、私としてもそれは研究の成果を無駄にするのは防ぎたい」

「あのー、私たち、避難しちゃっていいですか」

「ああ、えーと……」

「ミリアリアです。ミリアリア・ハウ」

それをきっかけに、サイたちはあらためてアスカさんに自己紹介をしました。

「私はノブザネ・アスカ、モルゲンレーテのMS開発主任だよ。さて、シエルターだが、ここら近辺のは満杯か、壊れていたよ」

「そんな！」

「地球軍の戦艦　アークエンジェルと連絡取ろうとしていたんだらう？ここで待って、戦艦に乗せてもらった方が却って安全かも知れないよ」

「……どうする？サイ、ルナ？」

みんなサイとあたしの顔を心配そうに見てくる。

「しょうがないかな。アスカさんといれば変なことにはならないと思っし」

「よし、そうしよう。アスカさん、何かできる事ありますか？」

「ああ、ありがとう。じゃあアークエンジェルとの通信を試し続け

てくれ。それからストライクにランチャーパックを付けてくれ。私はルナちゃんと違って格闘術は苦手だからな。はは…それからマリユー大尉、ちょっと話が……」

あたしたちはアスカさんの指示通りに動き始めた。シエルター……メイリンのシエルターは大丈夫かな…

アークエンジェルと通信が繋がった後しばらくして、コロニー内に爆音が響いた。

## 出会い

「アークエンジェルよ！」

マリユール大尉が嬉しそうに声をあげる。

爆炎から現れたのは一隻の戦艦だった。

見上げると鮮やかに赤と白に塗られた戦艦が飛んでいる。まるでペガサスのようだ、と思った。

着陸してきたアークエンジェルから黒髪のショートヘアの女性の女性が降りて、駆け寄ってきた。

「ラミアス大尉！それにアスカ主任も！御無事で何よりでありました！」

「あなた達こそ、よくアークエンジェルを……おかげで助かったわ」

「……艦長以下、艦の主立った士官は皆、戦死されました。無事だったのは艦にいた下士官と、十数名のみです。」

私はシャフトの中で運良く難を逃れました」

「艦長が……そんな……」

「よって今は、ラミアス大尉が最上級者であります。ご命令を、お願いします」

「……わかりました。奪われなかったこのストライク、なんとしても本部へ届けましょう！」

「ところで、この子供たちは？」

「ああ……ヘリオポリス工科大学の学生よ。彼らのおかげでそこにあるジンを捕獲できたわ」

「ジンを捕獲した！？それはお手柄です！さすがラミアス大尉！」

「いえ、その、この子達がOS改良してくれたり操縦してくれたの

よ

「この子供たちがですか!？」

「ここはオーブのコロニーだよ。コーディネイターの子もいるんだ」

アスカさんが口を挟んだ。

「コーディネイター!？」

それを聞いた兵士たちがいきなり銃を構えた!

「やめなさい!」

マリユール大尉がするどい声で制止した。

「私たちが戦っているのはザフトです!コーディネイターが皆敵ではありません!」

兵士たちは銃をおろして緊張が解かれた。マリユール大尉はアスカさんを見て苦笑した。アスカさんも苦笑した。

「しかし、この人数にMS一機でとなると、ザフトの攻撃を撃退するには……」

「それなんだがね、ほら、マリユール大尉」

「ええ、あなたたち、モルゲンレーテのこの場所へ行って……」

しばらくマリユール大尉たちと話しこんでいたアスカさんがこちらへやって来た。

「なあ、キラ君、ルナちゃん、頼みがある」

「なんですか？」

「もし、再びザフトが攻撃してきたら、またMSに乗ってくれないか？」

「え！？」

驚くあたしたちに、アスカさんは頭を下げた。

「すまん、ほかに操縦できる奴がいらないんだ。いや、戦う必要はない。自分が攻撃を受けないことを最優先にしてうるちよろしてくれれば、それでいいんだ。それだけで、こちらは助かる」

「でもMSってあれ一機しかないんじゃない？」

「実は、オーブでも秘密にアストレイってMSを試作しているね。ほら、あれだ」

少し、誇らしげに言うアスカさん。

ちょうど遠くに連合の兵士たちがMSをここに運んでくるのが見えた。

赤色と青色の二機のMS。バッテリーが切れて灰色のストライクとは違った、鮮やかな印象のMSだった。

「お断りします！僕達をもうこれ以上、戦争になんか巻き込まないで下さい！」

「キラ！？」

「僕は戦争が嫌で、戦いが嫌で中立のここを選んだんだ！それを…」

「…」  
「いいわよ。なら、キラは乗らなくて」

「え！？じゃあ、ルナマリアは乗るって言うの！？」

「うん。アスカさんも、逃げ回ってるだけでいいって言ったじゃない？それにザフトがまた攻めてくるのは確実

だろうし。艦の中で自分の運命他人任せにして震えてるのって、趣味じゃないの」

「そんな……」

「その代り、あの赤と青のMS、ちゃんと乗れるようにOS直すの手伝ってね」

「う、うん」

その後、カレッジのみんなに手伝ってもらって赤と青のモビルスーツ（アスカさんたちはレッドフレーム、ブルー

フレームと呼んでいるそうだ）からデータの吸出しと、OSの改良をした。データの吸出しは、アスカさんに言

われて連合の人たちには内緒だ。

赤にはナチュラル用の基礎的なOS、青にはオプションパーツの設計図などが入っていた。こういう情報は、使い

方によっては国と国との取引に使えるような物もあるそうだ。

OSの改良も、順調に進んだ。何のことはない。あたしたちがカトウラボでまかされてた作業の成果がかなり使われていたのだ。

「なあ、ルナ。もしザフトが攻めてきたらこいつに乗るんだろ？大丈夫か？」

サイが心配そうに声をかけてきた。サイは最年長らしく、結構みんなを見ていないようで見ていてフォローして

くれて頼もしい。と言ってもあたしとたった2ヶ月しか変わらないわけ、ともすれば妹しか気をつけてないあた

しとしては見習わらなきゃと思ったりする。

「うん、攻撃しろなんて言われたらあれだけど。このオーブのMS  
つてあつちの灰色のより大分軽いのよ。機動性  
は高いし逃げ回るだけならなんとかなりそう」

「そうか。くれぐれも、無理はするなよ。あー、もういつその艦  
ザフトに降伏してくれた方が安全かもな」  
「だめよ！」

やばっ思わず大声を出してしまった。

「ごめん、大声出しちゃって。でも、ザフトは血のバレンタインの  
復讐だつて言つて地球に連合国も中立国もか  
まわずNJ打ち込むような奴らなのよ。オーブもなんか連合と共同  
でMS開発してたんだし、捕まったら何されるか  
わかったもんじゃないわ。……あたしのお爺ちゃんとお婆ちゃん、  
エイプリルフル・クライシスで死んでる  
んだ」

「そうか。悪い事言つたな」

「いいのよ」

「……僕、僕も乗るよ。やっぱり」

突然、黙々とOSをいじっていたキラが言った。

「いや。最初は腹が立つたけどさ。このヘリオポリスは大きく感じ  
たけど、外にはもつと大きな世界が広がって  
て、無関係じゃいられないんだなって思い知らされて。それに、女  
の子だけ危険な目に遭わせる訳にはいかない  
じゃない？」

「……ありがとう。キラ」  
「がんばれよ、キラ」

なんて話していると、爆音が響いた！あれは！シャフトが！？  
赤い色の地球軍の戦闘機と、ジンとは違うMS　　後で聞いたらシ  
グーと言っらしい　　がコロニーの中へ飛び込  
んできた！

「敵だ！君たちも早く乗り込め！」

アスカさんがそう言うとストライクに乗り込む！あたしはレッドフ  
レーム、キラはブルーフレームに乗り込んだ。

アークエンジェルからミサイルが放たれ始めた。敵のMSはそれを  
かわし……ミサイルはシャフトに当たっつい  
る！このままじゃコロニーが！

ああ！スクリーンでは、地球軍の戦闘機がやられたところだった。  
敵のMSはこちらに向かい……なんか動きが、鈍った？

「そこだああー！」

『待つて！アスカ主任！それは！』

アスカ主任が超高速インパルス砲　　アグニを撃つ！それは敵のM  
Sの片腕片足を吹き飛ばし……コロニーに、大穴を空けてしまった。  
なんて言う威力！マリューさんが止めたのはこういう訳か。  
それでも。アグニに撃破された敵MSは、ふらふらとその穴から出  
て行った。ふー。

地球軍の戦闘機　　メビウスもふらふらとこちらにやってくる！コ  
ントロールは失っていないようで、なんとか  
アークエンジェルに着艦しようだ。

近くに行つて降りてみると、メビウスのパイロットも降りて来て挨拶していた。

「地球軍、第7機動艦隊所属、ムウ・ラ・フラガ大尉だ。よろしく」

「第2宙域、第5特務師団所属、マリユー・ラミアス大尉です」

「同じく、ナタル・バジール少尉であります」

「俺の乗ってきた船が落とされちまってねー。乗艦許可を貰いたいんだが、この艦の責任者は？」

「……艦長以下、艦の主立った士官は皆戦死されました。今は私がその任にあります」

「やれやれ、なんてこつた。あーともかく許可をくれよ、ラミアス大尉」

「わかりました。乗船を許可します」

その時、ストライクからもアスカさんが降りてきた。ちょっとしょんぼりしていた。

「すまない。マリユー大尉。アグニは思ったより威力が大きすぎた」  
「危急の際でしたから、シャフトに当たったら一大事でしたが、しようがないでしょう。無事敵MSを撃退できたのですから。それよりこちらのミサイルがシャフトに当たってしまった。オーブの皆さんには申し訳ありません」

ん

「いやいや」

「あー、マリユー大尉、彼は？」

「あ、モルゲンレーテのMS開発部主任のノブザネ・アスカさんです」

「ふーん。よろしく。……あんだ、コーディネイターかい？」

「……ああ」

「フラガ大尉、ここはオーブのコロニーで、現在艦に協力してくれ

る者の中にもコーディネーターがいます。ト  
ラブルの元になるような言動は厳に慎んでください」

ナタル少尉がこちらに目をやりかすかに苦笑した。前にもあったな  
あ。こんな事。堅苦しそうなナタル少尉だけ  
ど、慣れれば仲良くなれるかもしれない。

「すまん。他意はない。俺はただ聞きたかっただけなんだよね。な  
にしる、ここに来るまでの道中、これのパイ  
ロットになるはずだった連中の、シミュレーションをけっこう見て  
きたが、奴等、ノロくさ動かすにも四苦八苦  
してたもんでね。そういや、奪われなかったのは1機だけかい？あ  
の2機は？俺の知ってるデータにはない機体  
だが？」

「ああ、なんとというか、オーブの作っていた秘密兵器さ」  
「秘密兵器！そりゃなんとも頼もしそうな響きだねえ。ところで、  
外に居るのはクルーゼ隊だ。あいつはしつこ  
いぞ。こんなところでのんびりしているより、早く出航した方が  
いいと思うがね」

あたしたちが出航したのは、それからまもなくだった。そして、フ  
ラガ大尉の言葉が悪く当たった。まだコロニ  
ーから出ないうちに、敵のMSが今度は3数も襲来！アスカさんと  
あたしとキラも早速発進した。  
ストライクはさっきの反省からエールパックだ。

「落ち着いて逃げ回れよ、ルナちゃん、キラ君」

「はい！」

「ん？あれはイージスか！？奪ったMSを投入してくるとは。ザフ  
トも辛いのかな……いいか！あの赤いのはフェイズシフト装甲だ。」

実体弾は効かん！イーゲルシュテルンを無駄撃ちするな！」

「はい！……キラ？」

「あれは……は、はい！」

進入してきたジンは、拠点攻撃用の重爆撃装備だった。コロニーの事なんかこれっぽっちも考えてないんだ！

逃げ回るだけのつもりだったけど……守らなきゃ！

ジンは次々にミサイルをアークエンジェルに向けて放っている！イーゲルシュテルンとビームライフルで邪魔をする！当たらなくてもいい！邪魔さえできれば！

！一機、あたしの攻撃を避けようとしたところをアークエンジェルの砲火で撃沈された！やった！

もう一機もアークエンジェルの砲火に絡め取られた！……でも、そいつの放った最後のミサイルは、もうぼろぼろになつていたシャフトを直撃した

## 崩れた大地

『……応…答…』

ヘリオポリスは、あたしの目の前であっけなく崩壊した。  
父さん、母さん、メイリン……無事だよな？

『応答…し…ろ！ルナマリア・ホーク！』

ナタルさんだ！あたしは通信に気づいた。

「はい！レッドフレーム、ルナマリアです」

『無事か？』

「はい。キラやアスカさんは無事ですか？」

『アスカ主任は無事だ。もう帰投している。キラは今確認中だ。こちらの位置は分かるか？』

「はい」

『ならば帰投しろ。……戻れるな？』

「はい」

キラ、無事だと良いけど。

帰投すると、キラ帰ってた！救命ポッドを収容していた。エンジンが壊れていたそうだ。  
コクピットのハッチを開けると、ポッドの人たちが外に出てきていた。

あれ？あの金髪の子は……

「…………お前…………お前がなぜあんなものに乗っている!?!」

あの子がこっちに向かってきたけど、その後ろ!メイリン!

「メイリン!無事だったのね!よかった〜!」

「お姉ちゃん!怖かった〜」

ほんと、無事でよかった。二人で泣きながら抱き合った。

金髪の子は、あーとかうーとか言ってたけど、キラを見つけてそっちの方に飛んでいった。

とりあえず、疲れたから食堂に行こう。

歩きながら、メイリンにこれまでのことを話した。さすがに驚かれ、心配された。

でもね、お姉ちゃん、メイリンを守るためにも、安全なところに着くまで、頑張るから。

「あーメイリン!」

「無事だったんだな!よかった!」

食堂には、みんなもいた。みんな、メイリンの無事を喜んでくれた。これでカトウゼミ無事全員集合ね!

ちょっと離れた席に、金髪の子が座って緑茶をすすっていた。そう言えば、どんな子なんだろう。

「ねえ、キラ…………」

「やあ、ここにいたのか。ルナちゃん、キラ君、お疲れ様!みんなも、メイリンちゃんも無事でよかった!」

キラに金髪の子の事を聞こうとした時、アスカさんが現れた。

「アスカさんこそお疲れ様でした！そう言えば、もう一機いた、奪われたイージスですか、赤いMSはどうなりましたか？」

「ああ。やっぱり奪ったばかりじゃうまく扱えなかったらしくてね。なんとか片足を撃ちぬいたら撤退してくれ  
たよ」

そばでため息が聞こえた。キラが、ほっとしたような複雑な表情をしていた。

アスカさんはそんなキラを妙にまじめな顔で見つめていた。

「なあ、キラ君、ちょっと向こうで……え!？」

え?なに?アスカさんの視線をたどると、金髪の子がいた。

「もしかしてあなたは……」

「ちよつと待った……!!!」

あの子はいきなり飛び上がると、アスカさんを食堂の外に引きずっていった。

いったいなんだろう?あの子?キラに聞いても、カガリ・ユラと言っ名前以外はまだまだあまり話してないらしかつた。

結局、またアスカさんに会えたのは食事を終えて、MSの整備をしていた時だった。

「あ、アスカさん」

「ああ、整備お疲れ様。私もストライクの整備に来たよ」

「そう言えば、食堂にいた金髪の子お知り合いですか？」

「あ、ああ。オーブ本土で、ちょっと知ってたんだ。まあ、仲良くしてやってくれ」

「はい！そういえば、今あたしたちってどこに向かっているんですか？」

「ああ、ここから地球連合の基地で一番近いのは、ユーラシアのアルテミス要塞だ。そこへ向かう案もあったんだが」

「え！？ユーラシア！？絶対嫌です！あたしたち！」

「まあまあ。そう言う案もあったんだが、私が強硬に反対して別の案になったよ。私だって、ユーラシアの奴らにオーブの機密を奪われる危険は冒したくないからね」

アスカさんは、最後の方は小声でささやいた。とりあえず一安心だ。

「じゃあ、どこへ向かっているんですか？」

「デブリ帯さ」

「そんなとこに？。」

「武器弾薬はそれなりに積み込めたが、避難民を収容したからね。水と食料に余裕がなくなったんだ」

「そうですね。いい案だと思いますよ。死んでる人間より生きてる人間の方が怖いから。ザフトの裏をかけてればいいですね」

「そうだな。じゃあ、整備頑張ろうか」

## 捕虜

整備を一段落して、一休みしようと食堂に向かった時、向こうからみんなが歩いてきた。あれ？服が？

「キラー」

「あ！ツール、みんな」

「や、ルナも」

「お姉ちゃん、お疲れ様！」

「サイ…何？どうしたの？その格好？」

「僕達も艦の仕事を手伝おうかと思って。人手不足なんだから？」

「ブリッジに入るなら軍服着ろってさ」

「軍服はザフトの方が格好いいよなあ。階級章もねえからなんか間抜け」

「ルナやキラにはつか戦わせて、守ってもらってばつかじゃな」

「こういう状況なんだもの、私たちがだって、出来ることをして…」

「おーら行け！ひよっこども！」

「はい、チャンドラさん。じゃあな」

「後でね。ルナ、キラ」

「あー、お前らもまた出撃するんなら、今度はパイロットスーツを着ろよ！宇宙だからな！」

「はい！」

みんなの気持ち嬉しかった。

その夜、事件は起こった。

新造艦アークエンジェルの独房は、早くも使われている。あたしがヘリオポリスで捕縛した捕虜のためだ。

彼 ミゲル・アイマンと言つらしい にも食事を与えないとい  
けない。しかしなにしろザフトの兵士だ。  
危険なのでナチュラルが食事を運ぶよりは とあたしに役が回っ  
てきた。

「食事よ」

「あー俺どうなるんだ？銃殺か？別にかまわないぜ。さっさとす  
ならしろよ。そんな怖い顔してんなよ。コーディネイターは珍しい  
か？」

「食事、食べたら？」

「ちえ、手を繋がれてると食い難いな。ったく。まずい飯だぜ」

「まずい？プラントじゃさぞかしおいしい物食べられるんでしょ  
うね」

「ああ、最近流行つてたのは海鮮ジョンゴル鍋だったかな。ナチュ  
ラルのくせに食べたことないのかよ」

「あたしはコーディネイターだけど？」

「！コーディネイター？じゃあなんでプラントを裏切つたんだよ！  
プラントの恩を忘れたのか？」

「裏切り？残念ね。あたしは地球生まれよ。プラントには恩も義理  
もない！」

だめだ。感情が高ぶって行くのが止められない。

「……むしろ、恨み、ね。……食べられれば、なんでもよかつたわ  
よ」

「え？なんだつて？」

「あたしのお爺ちゃんとお婆ちゃんね、エイプリールフル・クラ  
イシスのおかげで、餓死したわ。」

「え！？」

「それだけじゃない。アニーやヤンカ、リンもハンナも……餓死し

たり、凍死したり！」

「……」

「それもこれも、あんたたちザフトが地球に無差別にNJ打ち込んだからよ！そのおかげで、あたしたちはコーディネイターだからって故郷を追われたのよ！それを、何？海鮮ジョンゴル鍋！？なんでみんなが死んであんたみたいなのが生きてるのよ！？ザフトなんか死んじゃえばいいんだ！！！」

「うわ、やめろ！ナイフなんか！誰か！助けてくれー！」

気が付くと、あたしはアスカさん、キラやトールに取り押さえられていた。

あたしは、アスカさんからきつく説教され、捕虜のいる独房に入ることを禁止された……

やっちゃったなー。ちょっと落ち込みながらあたしも夕食にするために、食堂に向かった。

「ルナ、気持ちわかるけどやりすぎだったよ」

「…ハア…わかってるわよ、キラ。アスカさんにもきっちり絞られたし」

「お！MSの整備、完了か？」

トールが何もなかったように声をかけてくる。その気遣いが嬉しい。ミリィは幸せ者だ。

「はは、うん。まあ。でも、パーツ洗浄機もあまり使えないから、まいっちゃう。手間ばかりかかっちゃって」

「そうなんだよなー給水制限で辛いよ。思いつきり水が飲みたいよ」「もうちょっとの我慢よ。トール。デブリ帯で補給するみたいだし」

「そうか！そいつは助かる！」

「ちよつと待てよ！デブリ帯ってまさか…」

サイってほんと頭がまわるわー

「まあ。残骸から勝手に補給させてもらうつてのが正確かな」

「「ええー……」」

「いいじゃない、補給できれば。……みんな、ほんとに飢えたりしたことはないよね」

「いきなりどうしたんだ、メイリン」

「ユーラシアでエイプリール・クライシスの後の話だけど。きつかった時期があったの。飢えるとね、すべての考えがそっち行っちゃうの。食べ物や水の事ばかりだった。だから、みんなはまだ大丈夫よ」

そう言うとメイリンはクスリと笑った。

「そついやメイリンたちってユーラシアからオーブに逃げてきたんだよね……」

あ、みんな黙っちゃった。うう、気まずい。

「うう……お前たち苦労したんだな。私は、私は……」

もうすっかりみんなの仲間になってるカガリが泣き始めちゃった。

「ほ、ほら、あたしたち家族ってちよつとしたサバイバーだから。考えがたくましくなるのよね。あは」

「そつだな。警沢言ってられないな」

あたしたちは支給されたお水を大切に飲みながら食事を終えた。

## プラントの歌姫

デブリ帯に着くと、あたしたちはポッドでの船外活動を頼まれた。時々出会う死体に驚いたりしながら、あたしたちは順調に物資を集めていった。

でも、どうしても水が足りない。

「あそこの水を!?!」

「ユニウスセブンには、一億トン近い水が凍り付いているんだ。」

「…でも!…ナタルさんだっけって見たでしょ?あのプラントは何十万人もの人が亡くなった場所で…それを…」

「キラってば!」

「水は、あれしか見つかっていないの。」

「誰も、大喜びしてる訳じゃない。水が見つかった!ってよ…」

「あたしは喜んでるわよ」

「メイリンってば!まあ、みんなはあそこに踏み込みたくはないだろうけどさ。しょうがないじゃん。あたしたち

は生きてるんだし。死んだ人に遠慮して渴き死になんて莫迦らしいよ」

「そうだな。しょうがないよな」

「だな」

みんな、ユニウスセブンからの補給に納得した。そしてミリーの提案で慰霊のために折り紙で鶴を折ることになった。

あたしは折る気にならなくて、MSの整備を言い訳にコクピットに籠っていた。あたしが失くしてしまった物を持っているミリーが羨ましかった。

「お姉ちゃん」

「あ、メイリン。どうしたの？」

「ん、差し入れ。紅茶とお菓子持ってきた。一緒に食べよ」

「ありがとう」

特に作業もしてないあたしを見ても何も言わず、メイリンはあたしの横に座ると紅茶とお菓子を差し出してきた。

あたしたちはなにも会話しないまま、ゆっくりと紅茶を飲み、お菓子を食べた。

なにも会話しないけど、メイリンはあたしの思ってる事がわかってくれてる気がする。

メイリンがたまらなく愛おしかった。

メイリン、あなただけは何があっても、お姉ちゃんが守るからね……

再び、水の補給のために作業ポッドに乗り込むみんな。今回は、あたしがみんなの護衛だ。アスカさんはいざと  
言う時のためにアークエンジェルに残ってる。今回も何も無いと良いけど。

順調に大きな氷塊をポッドに括り付け、アークエンジェルに帰艦しようとした時だった。

あれは、民間船？

まだ真新しいような、残骸になって間もないようなデブリが流れてきた。

！あれは！強行偵察型のジン！なんでこんなところに！

みんなが見つかりませんように……

その願いもむなしく、ジンは作業ポッドを見つけると発砲してきた！  
守らなきゃ！守らなきゃ！落ち着いて！落ち着いて……  
心を沈め、狙いを定め、ジンを狙撃　ジンは爆発した。MS越し  
とはいえ、人を殺す感覚はやっぱり嫌な物だった。

オーブに亡命して、追っ手と撃つたり撃たれたりする生活とはさよ  
ならだと思ったのに、なあ……

『ブー・ブー・ブー・ブー……』

ちよつと鬱に入ったあたしの耳に耳障りな音が入ってきた。

なに？これは、救難信号？

機体を動かしてあちこち見てみると、救難ポッドがあった。

「つくづくこの艦は、落し物拾いに縁があるようだな」

救命ポッドをアークエンジェルに持ち帰ると、ナタルさんがため息  
混じりで言う。

えへへ。でも、ヘリオポリスの時とは違ってあたしが持ち帰らな  
きゃ誰も見つけなかったかもしれない。しょう  
がないよね。

「開けませう？」

マードックさんが用心深くハッチを開く。

「ハロ、ハロー！ハロ、ラクス、ハロー！」

「ありがとうございます。御苦労様です」

「はああ！？」

あたしたちは、飛び出してきた妙な物体と、この場に似つかわしくないごてごて装飾の付いた服装の女の子に絶句した。

マリューさんたちがその子を尋問した。みんなで立ち聞きしていたら、見つかって追い払われてしまった。

でも、あの子がラクス・クライン エイプリール・クライシスを引き起こしたシーゲル・クラインの娘であること。ユニウスセブンの慰霊に来ていたらしいことはわかった。

「……クラインか」

ぼむ。肩に手を置かれた。振り向くと、トールが心配そうにこっちを見ていた。

「あはは、大丈夫よ。もうあんなことしないって！」

「そうならいいけど。まあ何か言いたくなったら聞き役ぐらいはできるから」

「ありがとう」

あたしたちは、氷塊をアークエンジェルに運び込む作業に移った。  
どどん氷が運び込まれる！これで給水制限生活しなくてすむ！う  
ふ

作業が終わって、食事時間になった時、ちょっとした問題？が起こ  
った。誰がラクス・クラインに食事を持っていくかと言うことだっ  
た。

うーん、キラにはもう捕虜への食事持つてもらってるし、あた  
しかメイリンになる。

ラクス・クラインはアイドルだそうだし、危険はそうないだろう。  
でも、あたしはメイリンが時々見せるエイプリアル・クライシスへ  
の鋭い恨みみたいな物を感じている。あたしも人の事いえないけど  
さ。

「……あたしが行くわ」

あたしがそう言った時だった。

「あらあら、みなさんここにいらしたんですね」

当のラクス・クライン本人が、なぜかここに現れた。

「わあー…驚かせてしまったのならすみません。私、喉が渴いて…  
…それに笑わないで下さいね、大分お腹も空

いてしまいましたの。こちらは食堂ですか？なにか頂けると嬉しい  
のですけど…」

「っで、ってちょっと待って！ 鍵とかってしてなかったわけ…？」

「やだ！なんでザフトの子が勝手に歩き回ってんの？」

「メイリン！落ち着いて！食事は、これから持って行くとしてたところですよ。部屋の鍵はかかってなかったんですか？ラクス・クラインさん」

「あら？勝手にではありませんわ。私、ちゃんとお部屋で聞きましたのよ。出かけても良いですかー？つて。そ

れも3度も。この子はお散歩が好きで…というか、鍵がかかっていると、必ず開けて出てしまいますの」

「それを勝手と言うんです！いいですか！鍵は勝手に出歩かれないから掛けてあるんです！……どうせ食事持つてくるところだし、案内しますから、部屋に戻ってください。キラ、この機械保管しておいて」

「あらあら、その子はピンクちゃんって言いますのよ」

「アラ？テヤンデイ！アソボ、アソボー。ミトメタクナイ！ミトメタクナイ！」

……ラクス・クラインは、わきやわきや言ってたけどようやく部屋に戻ってもらった。

「またここに居なくてはいけませんの？」

「ええ、そうですね。はい、食事です。ごゆっくりどうぞ」

「ありがとうございます。おいしそうですね。……でも詰まりませんわ。ずーっと一人で。私も向こうで皆さんとお話しながら頂きたいのに……」

「もう、勝手に出歩かないでください。これは地球軍の船ですから。ここにはあなたの父親が引き起こしたエイブリールフル・クライシスで家族を失くしてプラントに恨みを持つてる者もいるんですから。刺激する様な事は控えてください」

「……そうですね。悲しいことですわね」

「……」

「でも！貴方は優しいんですね！ありがとうございます」  
「？あたしが？はは」

このお嬢さんにはあたしも苦笑するしかなかった。

食事を終わらせて、廊下に出るとサイがいた。

「ルナ、お疲れ様」

「ありがと、サイ。ああいうの天然って言うのかな？ちょっと疲れちゃった。あはは」

部屋の中から歌声が小さく流れてきた。手持ち無沙汰で歌ってるのだろう。

「この歌あの子が歌ってるのか？綺麗な声だなー」

「……そうね。歌手やってるだけあるわ」

「でもやつぱ、それも遣伝子弄って、そうなったもんなのかな？」

「さあ？それよりも、あたしには何考えてピンクの髪にしたのが理解できないわ」

「たしかに。さ、行こうぜ！俺達も飯食わなきゃな」

食堂に戻ったあたしたちに朗報が待っていた。

第8艦隊先遣隊と連絡が取れたというのだ！ああー安心した。宇宙の中たった一艦で漂っているのは予想以上に  
あたしの心を心細がらせてたみたいだ。

避難民の人たちも、ほっとしてるようだ。

みんな、ハイキングの前日みたいにくきくしてた。  
……でも、そんな気持ちを吹き飛ばす通信が入ってきた！

『総員、第一戦闘配備！繰り返す！総員、第一戦闘配備！』

あたしは走りながらアスカさんに聞いた。

「先遣隊が襲われてるって!？」

「ああ！ナスカ級が一隻らしい」

「ナスカ級一隻？それ、ヘリオポリス襲った奴かな!？」

「わからん、でも、そうかも知れん!」

「ここまで来たんだもの、守らなきゃね！キラ!」

「うん!」

あたしたちがMSに乗り込んだ時、もっと詳しい状況が知らされた。

『相手はジン4機よ！いつも通り無理をせず、各艦の対空砲火と協力なさい!』

「はい!」

「ルナマリア・ホーク、レッドフレーム行きます!」

## 人質交換

あたしたちが戦場に出ると、すでに先遣隊の一艦　バーナードが撃破されていたようだった。あたしは心の中で手を合わせた。

「さあ、行くわよ！」

手近な敵目掛けて、ジンの突撃機銃をばらまく。どうせ敵はジンだし、引き付ければいいだけだという事で、ヘリオポリスやデブリ帯で確保したものが渡されている。アストレイのビームライフルだと威力は高いけど、エネルギーが切れると本体も動けなくなるのが難点だ。奪われた機体Xナンバーが出て来るまであまり使わない方が良さだろう。

「あれはオレンジに塗られたジン？あいつが指揮官！？こっちに来る！」

『お前はキラ、キラ・ヤマトか！？』

え？いきなり呼びかけられた。

「違うわよ！でもキラは友達よ！あなたひよっとしてキラの知り合いなの？キラは別のに乗っているわ。」

『……そうか、お前たちナチュラルがキラを誑かしているんだな！』

ひーん！敵を引き付けるなんてもんじゃない。あたしには2機ものジンが攻撃してきた。

この野郎！こんな事なら『キラか』と聞いてきたときにビームライフルでもぶち込んでやればよかった！

もう攻撃してるひまなんてない！

適当に敵の邪魔をするように弾をばら撒き、攻撃をかわす。その繰り返しがどれくらい続いたんだろう。

もう一時間も経っているような。まさか。ほかの人たちは無事なんだろうか？そんな事を考える暇すら相手は与

えてくれない。さすがに焦れて攻撃もしたくなるけど、ここが我慢のしどころだ。あたしは、目的通り、敵の攻撃を避けることに成功し続けている。へたに動きを変える方が、あぶない。

……でも、とうとうジンの突撃機銃の弾が尽きた。とっさに相手に投げつけるとビームライフルに切り替えた。

もうあといつまで持つだろう。

死も覚悟したそんな混戦状態の中、いきなり全周波帯でメイリンの声が響き渡った！

『これを見なさい！こっちはプラント最高評議会議長、シーゲル・クラインの娘のラクス・クラインを保護して

いるわ！この艦を落とせば、この子も一緒に死ぬわよ！ザフトは戦闘をやめなさい！』

一瞬の後、戦闘が止まった。

だが、すぐさまザフトからの皮肉めいた口調の通信が入ったのだ。

『人質を取るとは恐れ入ったものだ！ならこちらも言わせてもらおう！こちらは大西洋連邦外務次官、ジョージ・アルスターの令嬢フレイ・アルスターを保護している！地球連合軍は戦闘を止めよ！』

「救助した民間人を人質に取るのかお前たちは！この卑怯者め！」  
オレンジのジンから罵声が浴びせられた。

「ふざけないでよ！ヘリオポリスの避難民がいっぱい乗ってるアー  
クエンジェルしつこく攻撃してるくせに！こ  
の人でなし！」

お互いに怒鳴りあいながら距離を取った。

結局、この場での戦闘はこれで終わった。アスカさん、フラガさん  
もキラも無事だった。よかった。  
今回は先遣隊の皆さんがジン一機、フラガさんが一機落としただけ  
であとはお互い自分の事に手一杯で敵機の撃  
墜はなかった。

「お嬢ちゃんが敵を引き付けてくれてたおかげで助かったぜ！あり  
がとよ」

嬉しい。2機もの敵から逃げ続けた苦労が報われた気がする。  
そしてなにより先遣隊にもあれ以上の損害は無かった！モントゴメ  
リ、ローは無事だった。  
あたしたちはなんとか役目をやり遂げた。

戦闘の方は、マリユーさんたちと敵のお偉いさんが交渉して、ひと  
まず停戦、人質交換と言うことになったらしい。

汗だくになった髪を拭きながら、廊下を歩いてると、あの捕虜ミゲル・アイマンに出会った。

そっか。あなたも釈放されるんだ。よかったね。

今のあたしは妙に何もかも祝福したい気持ちになっていた。

「あのさあ。あんた、ルナマリア・ホークってんだってな」

いきなり、ミゲル・アイマンが立ち止まり、声を掛けてきた。

「……俺の家は貧乏でさ、弟が病気で、俺は治療費稼ぐためにザフトに入ったんだ。海鮮鍋みたいなご馳走食べたことなんて、入隊祝いの時が初めてさ。俺の家の周りはその家ばかりだったぜ。プラントが、贅沢三昧してるなんて思ってくれるなよな。頼む」

「……そう。……元気で。あの時はごめん」

あたしがそう言うと、彼は連れられていった。

でも、彼が生きて捕まっていたことなんてよくわかったなあ。

あとでアスカさんに聞いたら、ヘリオポリスを崩壊させた攻撃の生き証人として宣伝に使われることを防ぐため、

ザフトも念のため言ってみただけと言う感じらしかった。

捕虜交換も終わり、アークエンジェルに若干の補充要員が送られてきた。個艦防御力が高いということでジョー

ジさんとフレイさんも乗り込んできた。

アスカさんの情報だと、ジョージさんは反コーディネイター運動を行うブルーコスモスだという事だけど、ジョー

ージさんもフレイさんも特にあたしやキラやアスカさんがコーディネイターだと知っても特に反応しなかった。ブルーコスモスにも穏健派から、過激派まで色々あるということだけど穏健派、と言うことだろうか。

メイリンは勝手な事をして、マリユールさんたちにだいぶ怒られたみたいだ。

「でも、でも、お姉ちゃんがやられそうだったから見てられなくて……」

「うん、ありがとう。メイリンのおかげで無事だったよ」

あたしはメイリンをぎゅっと抱きしめた。

「フレイ、大丈夫だったか？ザフトの奴らにひどいことされなかったか」

「うん、ありがとう、サイ」

フレイの言う事では、フレイと一緒に救命ポッドにいたヘリオポリスの人たちは別のところへ送られ、フレイだけクルーゼ隊長　アークエンジェルを追っている敵の親玉らしい

の独断で残されていたそうだ。

心細かったろうな、と思う。

「別に、ひどいこともされなかったわよ。結構お客様扱いだったわ。あたしに付けられた護衛の男の子　ニコルって子なんて、よくピアノを弾いてくれたりして、気晴らしになるように気を使ってくれたし……」

よかった。本当によかった。ザフトも結構紳士なところあるんだ。そ

れともフレイがお嬢様だったからかな？

それよりもびっくりしたのは、なんとサイとフレイが婚約者だという事だった。

まあプラントじゃ13で成人だそうだけど……いくらなんでも早くない？それに、あたしは聞いてしまったのだ。フレイが窓からザフト艦の方を見て

「無事でいて……ニコル……」

と辛そうな顔でつぶやくのを。

## ブルーコスモスの盟主

それからしばらくの航海で、とうとうアーケエンジェルは第8艦隊に合流した！

うわぁ！窓から見ると船がいっぱい！

でも、ここでみんなとお別れかな、と思うと寂しくもあった。

実は、アスカさんからもう少し、モルゲンレーテ所属のMS開発協力員としてアストレイのパイロットを続けてくれと頼み込まれていたのだ。キラは断ったけど、あたしは色々考えて受け入れた。メイリンともよく話しあって、結局メイリンもモルゲンレーテ所属として残る事に決めた。まだみんなには秘密だけど。

この艦と地球軍の新型MS、があるから敵がしつこく追ってくるのはわかっている。けど、今のあたしには、それから離れて無防備なシヤトルに乗るのが怖い。自分で武器を手に行っている方が安心できちゃう。

それに……考えてしまうのだ。オーブに帰って、本当に終わりにするのか、平和になるのかと。中立とは言えオーブの外はやっぱ依然として戦争のまま。もしかしたら巻き込まれるかもしれない。ううん、もうとっくに巻き込まれているんだ。なら、あたしの力があたしたち家族を受け入れてくれたオーブのためになるなら、役に立ちたい

旗艦のメネラオスからハルバートン准将がやってきた。お髭の素敵なおじ様だ。

みんなで整列してお迎えした。

准将は、マリユールさんやアスカさんたちと挨拶をするところらにやってきた。

「……ああ、マリユール大尉。彼らが……」

「はい。ヘリオポリスの学生たちです。彼らがいなければ、この艦はとてもここまでたどりつけなかったでしょう」

「君達の御家族の消息も確認してきたぞ。皆さん、御無事だ！」

「あー！よかつたあ」

「よかつたねー！」

「とんでもない状況の中、よく頑張ってくれたなあ。私からも心から礼を言う」

そしてあたしとメイリンの前に来ると頭を下げられてしまった！

「君たちには、これからも苦勞をかけるという。よろしく、頼む」

「は、はいー！」

「閣下、お時間があまり……」

「わかった、ホフマン。後でまた君達ともゆっくりと話したいものだなあ」

そう言っつて准将は去っていった。

去つたとたん、あたしはみんなから質問攻めにされた。

「おい、ルナ！お前この艦に残るつて言うのか！？」

「そつだよ。せつかく解放されるのに……」

「メイリンは？残るのか」

「うん。あたしがお姉ちゃん置いてくわけないでしょお？」

「ルナ、ちゃんとした理由聞かせてもらえるんでしょつね？」

しようがない。あたしは正直な気持ちを話した。でも、みんなを悩ませてしまったようだった。

カガリはあたしの肩をがしつとつかんで……また、泣かれてしまった。

ジョージ・アルスターさんが飛び込んできた。なんでも、低軌道衛

星経由で地球と奇跡的にレーザー通信が繋がったらしい。

アスカさん、あたしやキラに、会いたがっている人がいるそうだ。誰だろう？あたしはちよっとドキドキして通信機に向かった。時々ノイズが混じる画面には、金髪のちよっとにやけた感じの男の人が写っていた。彼は、こちらを見ると驚いたようにつぶやいた。

「エリス」

「……いや、失礼しました。」

すぐ彼は気を取り直したように続けた。

「僕は、国防産業連合理事のムルタ・アズラエルです。あなた方が、地球軍に協力していただいているオーブのコーディネイターの方々ですか。僕からもお礼を言いますよ。同じ地球に生きる者同士、これを機会にオーブとも、もっと密接に協力し合いたいものですね」  
「ありがとうございます。自分としては何を言える立場でもありませんが、お互いによりよき未来を築けたらよいと思っております。」

アスカさんが答えた。

「あと、知っているかもしれませんが僕は反コーディネイターの政治団体「ブルーコスモス」の盟主でもあります。その立場から言いますが、僕はコーディネイターが作られるのを止めるつもりです。ただ、今存在しているコーディネイターをどうしようとは思っていません。まあ、空の悪魔に対してはナチュラル・コーディネイターと言った問題とは別の次元から厳しく対処するつもりですがね。もし、コーディネイターが無くなるまでの世界を、コーディネイターに住みよいものにしたければ、頑張って活躍してくださいね。宣伝はしっかりしてあげますから」

興味深い話だった。もっと聞いていたかったけど、残念ながら通信が途切れてしまった。

ジョージさんは、盟主がわざわざコーディネイターに会いたがるなんてめつたに無いことだ、と言っていた。

その後ジョージさんはフレイとランチへ移動して行った。

フレイは別れ際

「……………戦争って嫌よね……………早く終わればいいのに……………」

と言った。

うん、早く終わればいいね。終わらせたい。

気をつけて！と手を振った。フレイも手を振ってランチの中へ入っていった。

## 低軌道会戦

『総員！第一戦闘配備！総員！第一戦闘配備！』

突然警報がなった。もう！地球降下直前なのに！

あたしは格納庫に向かって走った。そこで、思いがけない人にあっ  
た。

「キラ！？艦をおりたんじゃなかったの」

「ルナの言ったこと、自分でも色々考えた結論だよ。それに、前に  
フラガ大尉から言われたんだ。出来るだけの力を持っているなら、  
出来ることをやれって！これが今の僕の出来ることだ！」

「OK！頑張ろうね！」

コクピットで何もせずにいるのは安心であると同時に怖い。

今回相手は3隻の軍艦に、MSが確認されているのが13機、その  
内3機は今まで相手にしたことが無いXナンバー　バスター、ブ  
リッツ、デュエルと、これまでで最大の数だ。

……怖い。

もう外では艦隊戦が始まっている。

そばのメビウスではフラガ少佐（昇進した！）から艦隊のMA隊に  
命令、と言うかアドバイスの声が飛んでいる。

「いいか、一撃離脱に徹しろ！一撃したら逃げ回れ！速度と数じゃ  
こっちが勝ってる！相手を疲れさせるんだ！相手があきらめて別の  
奴を狙いだしたらまた攻撃しろ！絶対密集するなよ！」

一機、また一機、弾んだ声で撃墜報告が入ってくる。

それでも敵のMSは着実に艦隊に近づき、メビウス隊が発進を始める。出来るだけ多く敵のMSが撃墜されますように！

幸い敵のジンの多くはこちらのメビウス隊に拘束されているようだ。撃墜報告も続いている。でも、それを抜けてこようととしているのが、奪われたXナンバー3機！

『総員、大気圏突入準備作業を開始せよ』

「え、この状態で降りるの？って言うかこの声、カズイ!？」

『ああ、色々考えてみんな残った!ばつちりバックアップしてやるからな!』

そんな……でも、嬉しい。

「艦長!ギリギリまで俺達を出せ!何分ある?」

フラガ少佐が要請する!

「このままじゃあ、格納庫に座ったままやられる!艦長!」

アスカさんも叫ぶ!

「分かった!ただし、フェイススリーまでに戻れ!高度とタイムは常に注意しろ!」

ナタルさんだ!

アスカさんからあたしたちに注意が飛ぶ!

「いいか、いざとなったらXナンバーは単独で大気圏突入が可能だ!お前らは惑わされずフェイススリーまでに戻れ!」

防いでみせる！

「ルナマリア・ホーク、レッドフレーム行きます！」

……くそ！重力が重い！

Xナンバーよりも軽いアストレイでもこうなのだ。Xナンバーはなおさら動きが鈍くなってる。なら！

あたしは、一番相性が良さそうな相手を選んだ。バスターだ。

バスターは右手にリニアレールガン、左手に大型ビームライフルと高出力の砲を撃ってくる！

でもあたしの身軽なレッドフレームはそんなものに当たらない！後数分！ビームライフルも遠慮なく撃てる！

とうとう何射目かでバスターの右腰のレールガンを破壊した！やった！

今まで電力の消耗が激しくて使わなかったけど……使うなら今！

あたしはビームサーベルを抜き放ち、大型ビームライフルをかわしながら上からバスターに切り付けた！盾を持たないバスターはそれを防げず、あたしはバスターの左腕を見事切り落とした！

バスターはそのまま重力に引かれ墜ちて行った。

他には！？

敵の艦　ガモフ級が！メビウスにやられながらもメネラオスに向けて突進している！

准将が！やらせない！あ、フラガ少佐がエンジンを打ち抜いた！あと一息！ええい！

対空砲火をくぐって艦橋にビームサーベルを突き刺すと重力のまま下に落ちながら切り裂いた！

キラも、こっちに飛んできた！反対側にビームサーベルを突き刺し

て切り裂いたみたい！

ガモフ級は崩れ落ちた！

メネラオスは徐々に上昇していった。

ふー、なんとか！

次！ああ、そろそろ高度が限界だ。あたしとキラ、フラガ少佐はアークエンジェルに着艦した。

アスカさんは！？

あ、あれは！ストライクとデュエルの間になんでメネラオスのシャトルが！？

デュエルはそつちにビームライフルを向ける！！なんでシャトルを狙うのよ！？あれにはフレイが！

重力がもどかしい。無理な体勢から撃ってもデュエルにはあたらな  
い。

だめえええー！

その時、信じられないことが目の前で起きた。

「だめです！イザーク！！シャトルにはフレイさんが！！」

上空からすごい速度で降りてきたブリッツが、シャトルをかばうかのようにシャトルとデュエルの間に入り、デュエルのビームライフルに、撃たれた

## フレイとニコル

「うあゝ ああ……ううう……」

「ニコル！大丈夫？ニコル……汗びっしょりだわ……どうしようルナ、ニコルったら火傷も怪我もしてるのよ」

「フレイも少し休みなよ。大丈夫よ、きっと。お医者さんも、火傷や怪我は致命的なものななさそうだって言ってたじゃない」

「でも、でも、全然熱が下がらないし……苦しそうで！」

「大丈夫よ。コーデイネイターの身体って結構タフだから」

フレイが、泣きじゃくっている。

あたしは、大気圏突入の時の事を思い出していた。

ブリッツのすぐ後を、シャトルをかばう為にすごい速度で降下したにストライクは、すでに自力ではアークエンジェルに戻れなかった。そう判断すると、マリューさんは降下地点がずれるのを承知で、艦を寄せたのだ。それを見ると、アスカさんはブリッツも抱え無事着艦した。

フレイがここにいる理由は……結局シャトルもアークエンジェルの近くに降りて来てしまったからだ。せつかくシャトルに移ったのに、またアークエンジェルに戻る事になってがっかりしている避難民の皆さんを見るのは心苦しい。こうなったら、なんとしてもオーブまで無事にたどり着かなきゃ！

「うぐあ……フレイ？」

「ニコル？ニコル！気が付いたの？」

「フレイさん……無事で……あの時シャトルの窓に……あなたが見えたんです。だから、無我夢中で、うぐ」

「ニコル、無理しないで！……ありがとう。この命、あなたに助け

られたわ」

よかった。ニコルさん、気が付いたみたい。フレイ、今度はきれいなうれし涙だね。あたしも一休みしようっと。

「え！ニコルさん、気が付いたの？」

「へえ、あいつ、気が付いたんだ」

「うん、ちょうどさっきね。もう部屋に戻ってる。食事はフレイが持って来てたけど……」

「あ、フレイ……！」

「あ、みんなも休憩？」

「どう？ニコルさん」

「ありがとう。もうほんと大丈夫みたいよ。食事もしたし、昨夜の騒ぎが嘘みたい。先生には怪我が治るまでは寝てろって言われてたけど……やっぱり違うのね、体の出来が」

「……そっか……。でも、よかったじゃない、元気になって」

「フレイも疲れたる。昨夜はずっと、ニコルさんに付いてたもんな。少し休んだ方が……」

「私は大丈夫よ。食事もニコルと一緒にしたし、みんなみたいに、艦の仕事があるわけではないんだから」

「フレイ……」

「ニコルには早く良くなってもらわなくちゃ……」

「まだ心配だから、行ってるわね」

「フレイ……けどさあ……」

「何よ！サイ」

「ああ……いや……何って……」

「サイ……そのうちちゃんと話そうと思ってたけど。貴方とのことは……パパの決めたことだけ……私、一旦全てから自由になって考えたいの。ナチュラルの事、コーディネイターの事、考えなきゃ

いけないと思う事がいっぱいあるの。貴方との事も……白紙に戻して下さい」

「……！」

「まだお話だけだったんだし……何もそれに縛られることないと思うの」

そう言うと、フレイは去って行った。強くなったな。彼女。いい感じ。

残されたのは、嘆く男一人。

「ああ……フレイ！……ああ……」

「サイ、気持ちはわかるけど。お互い若いんだしさあ。あきらめきれないんだっいたら自分を磨きなおしてアタックし直すなりしなよ」

「うづう……」

まったく！

あー、早く重力になれないとなあ。アークエンジェルにいたほんの少しの間に、結構重力の感覚を忘れてしまっていた。人間ってのは適応能力がすごいと言うことなのか。

フラガ少佐はスカイグラスパーと言う戦闘機を付きっ切りで調整している。あの戦闘機はストライク用のストライカーパックを装備できるのだと言う。あたしのレッドフレームにもストライカーパック欲しいなあ。特にソードはいらないけどエールパックやランチャーパックは羨ましい。

「これ、盾になって、ビームライフルで、ビームソード付いてて姿

も隠せるんだろ？おもしろいよな」

「おもしろいよー。ま、姿を隠せる機能は、腕だけ隠せても役に立つかわかんないけどね」

調整してるあたしをカガリが覗き込む。

……そう！レッドフレームにも新しい武装が加わった！と言うか今、その調整を、地上用への調整と併せてやってる。破損したブリッツの右腕を使って攻盾システム「トリケロス」を付けたのだ！

胴体部にビームを受けたブリッツはアークエンジェルじゃ直せそうも無いって事で試しに付けたらば。

盾にPS装甲の腕、ちょっと威力は低いけどジンの突撃銃より威力が高く、普通のビームライフルより消耗が少ないビームライフルはあたしの好みで役に立ちそうなのだ。

ブルーフレームはブリッツの左腕のピアサーロック「グレイプニール」を試しに付けている。

カガリは今度はキラの方に行ってる。忙しい子だ。

彼女だけはなぜかあたしやキラと同じモルゲンレーテ所属としての艦に残っているのだ。

そんなわけでカガリはよくアストレイを覗きにやってくる。操縦もしてみたがってる。……実は、モルゲンレーテ所属の仲間だけで、メイリンとカガリを中心に、例のレッドフレームに載っていたナチユラル用のOSの改良も秘密に進めている。いつかカガリがアストレイを操縦できる日も来るかもしれない。

きつと艦橋でも、状況把握や地上での運用に向けて、色々やってるだろうな。

アフリカの最初の夜はこうして更けていった。



## 明けの砂漠

『第二戦闘配備発令！繰り返す！第二戦争配備発令！』

砂漠に降りて二日目、ようやく調整を終えて寝ようとしていたら、警報が鳴り響いた。

「あー！せつかく眠りかけたのに！」

待機していたアスカさんたちも来て、MSに乗り込む。

「敵は！？どこですか？」

アークエンジェルにミサイル攻撃をかけてきたのは、ザフトの戦闘ヘリらしかった。

戦車って空中攻撃に弱かったよね。MSは戦車じゃないけど。

頭上から攻撃を受けるのは不安がよぎる。

だが、艦は小回りが利かない。スカイグラスパーはまだ出れない。MS隊に出撃依頼が下りた。

「いいか、初めての地上、それも砂漠だ！各自援護しあいながら最終調整をしる！」

「はい！」

出撃したがやはり。砂に若干足を取られる感じがする。

一番プログラミングが早いのはキラだ。キラから順番に戦闘ヘリを牽制しながら最終調整をする。

よし、できた！

！なんだあれ！砂丘の向こうからいきなり四足のMSが2機襲ってきた！

体当たりされるが、とっさに飛びのいた！そこにミサイル攻撃！衝撃が襲う！

相手の機動性はかなりのものだ。なら！いつもの手！こつちもこきざみに、ジグザグに動いたりしながら、重突撃銃の弾を相手の進路へ満遍なくばら撒き相手の動きの邪魔をする！

ストライクは飛び上がって上空から敵のMS　バクウを重突撃銃で襲う！あ！ミサイルランチャーに当たって一機が爆発した！

もう一機！あたしたち3機の弾幕に包まれ動きを止める。

アスカさんとキラが弾幕を張ってくれる中、あたしはレッドフレームの右腕の姿を消す。

ふふ、一度やってみたかったのよね。さあ、敵さん射線が読めるかしら？心を静めてビームライフルを撃つ

バクウを見事貫いた！

今度はキラが合図を送っている！よし！援護射撃開始！キラはグレイブニールを打ち出し、鎖にバクウを引っ掛けた！すぐにそいつに射撃が集中して止めを刺す。いい感じ！

あたしが不安に思っていた空中からの攻撃、逆にあたしたちが使って、バクウを立体攻撃で追い詰めていく！

ズーン！ズズーン！！

つ光の線が天に描かれたと思うとアークエンジェルがどこからか攻撃されてる！

フラガさんが発艦し、攻撃元へ向かっていく。

また第二撃が！あたしたちは、アークエンジェルを守るため空に弾幕を張らざるを得なかった。その隙を突いて、残りのバクウは撤退して行った。

地上での初めての戦闘は、なかなかうまくいった。

つと、あたしたちのMSに向かってバギーが走ってくる。敵意はなさそうだけど。

「さすが地球軍だな！感心したぜ！」

それが地元のレジスタンス組織「明けの砂漠」の第一声だった。

「明けの砂漠」が夜明けに登場なんてできすぎよね。でも砂漠ってすぐ明るくなるのね。

「初めまして。地球軍第8艦隊、マリユー・ラミアスです」

「あー第8艦隊って言えばこないだザフトに辛勝したらしいな。おめでとさん」

「……」

「俺達は明けの砂漠だ。俺はサイーブ・アシユマン。分かってんだろ？別にあんた方を助けに来た訳じゃない」

「……」

「はん！こっちもこっちの敵を追って来たまででねえ！」

「砂漠の虎相手に、ずっとこんなことを？」

「あんたの顔はどっかで見えたことあるなあ」

「ムウ・ラ・フラガだ。この辺に、知り合いは居ないがね」

「エンディミオンの鷹とこんなところで会えるとはよお」

下の方でマリユールさんたちがレジスタンスと話してる。  
退屈だなあ。サイーブって人、髭は髭でもハルバートン少将（ザフトに勝って昇進したらしい！）と大違いだ。

結局協力することになったらしい。アークエンジェルはレジスタンスの案内で隠れ場所に向かった。

「や、みんなここにいたんだ」

「やあルナ。はあ、レジスタンスの基地に居るなんて……なんか、話がどんどん変な方向へ行ってる気がする」

「はあ……。砂漠だなんてさ……。あゝあこんなことならあん時、残るなんて言うんじゃないかよ」

「でも、あそこでシャトル乗っても、結局いつしよだぜ？」

「これから……。どうなるんだろうね……。私達……」

「なるようになるって！じゃ、あたしMSの調整があるから」

「ルナは元気だなあ」

あたしも元気はつらつって訳じゃないけどね。やっぱり、宇宙の調整された環境からいきなり砂漠じゃ、ね。

「おー、お嬢ちゃん、また何やってんだ？」

「昨夜の戦闘の時、また接地圧とか弄ったんで、その微調整とかですよ」

「ほおー、なるほどねー。便利なパイロットだよなあ、お前って。なんか俄然やる気じゃねえかよ！」

「マードックさんこそ。防塵とか防砂とか整備大変でしょう」

「はっはっはっは。そこはベテランの腕って奴にまかすとけ！」

整備の人たちは、環境が変わっても頑張ってくれてる。あたしも頑張らなきゃ！

調整も終わってメイリンやカガリ、キラと、レジスタンスの人たちと焚き火を囲んでいた。

マリユーさんやアスカさんはあつちでサイドさんと同じように焚き火にあたっている。

砂漠の夜って結構寒くなるのよね。こつやって温かいコーヒー持っているとキャンプみたいで和むなあ。

「じゃあ、お前たち、地球軍の兵士ってわけじゃないのか？」

仲良くなったアフメドって子が話しかけてくる。

「ああ、そうだ」

「うん、MSのパイロットと、メイリンとカガリはオーブのモルゲンレーテの社員なんだ。まあ、パイロットは士官待遇だったりするけどさ。」

「兵士でもないのによく戦ってるなあ」

「それはお前も同じだろ。レジスタンスなんてそう簡単に出来ることじゃないだろ」

「私は直接戦うわけじゃないし」

「まあ、あたしたちはザフトにヘリオポリスぶっ壊されてなりゆきで、が大きいかな」

「俺らは、自分の地元をザフトでも連合でも他人の勝手にされたくないって誇りかな……どうした！」

「どうしたんだアフメド」

いきなり警笛が鳴り響いた。

「タツシルの方角が……燃えてる！」



## バナディーヤ

レジスタンスの人たちがタツシルへ向かう。

「アフメド！気をつけて！」

「ああ！」

「落ち着け！半数はここに残れ！別働隊があるかも知れん！」

サイーブさんが命令している。

こちらからもフラガさんがスカイグラスパーで様子を見に行くことになった。

タツシルの人たち、無事だといいけど。

「総員！直ちに帰投！警戒態勢を取る！」

マリユールさんもみんなに呼びかける。

あたしたちは急いでアークエンジェルに戻った。

格納庫に向かう時、走ってくるフレイに出会った。

「ちょっと、フレイ、今外に出るとあぶないって！」

「先生　お医者さまのお供をするのよ。私、お医者さんになろうと思うの。一番直接人の命を助けられるでしょう？じゃ、急ぐから！」

いい笑顔してた。フレイは、自分の道を見つけたみたいだ。

……結局タツシルのひとたちは無事だった。アンドリユー・バルトフェルド砂漠の虎　　ここらへんのザフトの指揮官は、警告してから攻撃したらしい。

兵糧攻めかな？趣味で読んでる歴史書にそんな攻め方があった。民衆も城に追い込んで、食料を早くに消耗させてしまふのだ。でなくとも、家族が残っていればそっちを生かすことに力が注がれる。砂漠の虎は、頭がいい。

続いてフラガさんから報告が入ってくる。少くない人たちがバクウを倒すためにバギーで出撃したと言うのだ！そんな莫迦なことを！

「アスカ主任、ルナマリアさん、行ってもらえるかしら？キラ君は残って！」

「はい！」

ストライクはエール装備で軽々と飛んでいく。いいなあ。

あたしはまずタツシルに向かった。そこで、アフメドが出撃したことを知ったのだった。無謀なことを！間に合っ！あたしは急いでバギーの後を追った。

あたしが追いついた時、ストライクは3機のバクウを相手に苦戦していた。空中に飛び上がろうとしてもその度に邪魔され、翻弄されていた。

「アスカさん」

「ルナちゃんか！助かる！」

あたしは右腕にはミラーージュコロイドを発生させた。この間以外に使えたからだ。左腕には重突撃銃を持って撃ちまくって突っ込む！案の定、あたしの右側に回り込んで飛び掛ってくるバクウがいた！

残念ね。引き付けて、ビームライフルを放つ。

ストライクがハイ・ジャンプして空中から一機に射撃を集中する。あたしも両腕の重突撃銃とビームライフルでそいつに弾幕を張る。やった！倒した！

残りの一機は、自らミサイルランチャーを切り離して身軽になると素早く撤退して行った。

戦いの後、あたしはアフメドが亡くなったのを知った……

「じゃあ、4時間後に。みんな、頼んだぞ。気をつける」

そう言ってナタルさんはバギーで去って行った。

ここはバナデーヤの町だ。あたしとメイリン、カガリとキラの四人はみんなから頼まれた物の買出しに来た。

どうやらあたしたちMSパイロットの気晴らしをさせようと言うつもりもあるらしい。そう言う風にちゃんと気を使ってくれるのが嬉しい。

「砂漠の虎の本拠地って言うけど、結構平和でにぎやかだね、お姉ちゃん」

「うん。結構市長とかになっても成功するんじゃないかな、砂漠の虎って」

でも。美しい町並みの裏にあたしは戦闘の痕を見つけてしまった。そして、その向こうに城砦のようにそびえ立つ陸上戦艦レセップス

を。

やっぱり、戦争してるんだよね……

「ああ……重い。なんで僕だけこんなに持たなきゃいけないんだ」

「ふふふ。荷物持ちは男のお約束よ。キラさん」

「これでだいたい揃ったがあ、フレイの注文は無茶だぞ。エリザリオの乳液だの化粧水だの、こゝんなところにあるもんか」

「お待たせねー」

あ、ボーイさんが料理持ってきた。

「何、これ？」

「ドネルケバブさ！あー、疲れたし腹も減った。ほら、お前も食べよ。このチリソースを掛けてえ……」

「あーいや待ったあ！ちよつと待ったあ！ケバブにチリソースなんて何を言ってるんだ！このヨーグルトソースを掛けるのが常識だろうがあ」

突然サングラスをかけた妙な男の人が声をかけてきた。

「ああ？」

「いや、常識というよりも…もつとこつ…んー……そう！ヨーグルトソースを掛けないなんて、この料理に対する冒瀆だよ！」

「なんなんだお前は！」

かまわずカガリはチリソースをかけた。

「ああ……！なんてことを！」

「見ず知らずの男に、私の食べ方にとやかく言われる筋合いはない

「ハグッ……」

「あー！なんという……」

「つままー！ーいー！ー！ほうらお前らも！ケバブにはチリソースが当たり前だ！」

「あ、ごめん。あたし、カプサイシンって苦手なんだ」

「私も苦手。ヨーグルトソースにしてみる」

もぐもぐ……

「おいしいー！」

「おいしいねーお姉ちゃん！」

「ほーら見たまえ！」

「キラ、キラはチリソースかけるよな！？」

「ぼ、僕は……」

「だああ待ちたまえ！彼まで邪道に墮とす気が！？」

「何をするんだ！引つ込んでろ！」

「君こそ何をする！ええい！この！」

「ぬううう！」

「ああ……」

カガリとサングラス男が争ったせいで、キラのドネルケバブには、チリソースとヨーグルトソースがどっぶりとかかってしまった

「いや〜悪かったねえ〜」

「……ええ……まあ……ミックスもなかなか……」

汗を浮かべながら、こっそり下から余分なソースをしばり落としながらキラは食べてる。

「しかし凄い買い物だねえ。パーティーでもやるの？」

「五月蠅いなあ、余計なお世話だ！大体お前は何なんだ？勝手に座り込んであーだこーだと……」

「！伏せろ！」

「うわあ」

いきなりこちら辺が銃撃を受けた！あたしたちは倒れたテーブルの陰に隠れた。

「無事が君達！」

「な…なんなんだ一体……」

「死ね！コーディネイター！宇宙の化け物め！」

「青き清浄なる世界の為に！」

そう言いながら自動小銃を乱射して男たちが襲ってきた！

「ブルーコスモスか！」

「うわああ！！！」

あ、サングラス男にブルーコスモスの人が撃たれた！

「構わん！全て排除しろ！」

サングラス男が命令してる。見ると、あたしたちの周りで、同じように倒したテーブルを盾にして男の人たちがブルーコスモスらしき人たちと戦ってる！

こっちの方に拳銃が転がってきた。あ、建物の陰から男が現れこっちを攻撃しようとしている！

あたしはとっさに拳銃を拾うと、しっかり両手で構え、そいつに向

かって撃つた！

「うつつ！」

そいつが持ってた自動小銃に当たってそいつは銃を取り落とす！続けざまにもう3発放つと、そいつは地面に倒れこんだ。

「よし、終わったか？」

一緒に防戦してた横の男の人が、確認して襲ってきた男たちに止めを刺している。

「お前……さすがに銃の腕すごいな。大丈夫か」

「うん、ありがとう、カガリ」

「隊長お！御無事で！」

緑の軍服みたいなものを着た男が走ってきた。

「ああ！私は平気だ。彼女のおかげでな」

そう言うと、彼は帽子をサングラスを取った。

「いいえ、こちらも自分の身を守っただけですし」

……？なんか、彼、がっかりしたような顔をしている。

「あの、この町の警備隊の隊長さんかなにかですか」

「まだ自己紹介してなかったな。僕の名前はアンドリュー・バルトフェルドだ」

「え？ひよつとして、砂漠の…虎…？」

「いやあく助かったよ。ありがとつ。ふふ。名乗ってもわかってくれなかったら落ち込んでたよ」

彼はにんまり笑った。

## 砂漠の虎

「さ、どうぞ〜」

「うわ〜！」

なんだかよくわからないうちに、バルトフェルドさんにまるで宮殿のような建物に案内されてた。

「いえ…僕達はほんともう……」

「いやいや〜、お茶を台無しにした上に助けてもらって、彼女なんか服グチャグチャじゃないの。それをそのまま帰すわけにはいかないでしょ。ね？僕としては」

確かにカガリはチリソースとヨーグルトソースを頭からかぶって悲惨な状態だ。

でも油断しちゃいけない。拾ったまま、こっそり腰に挟んで隠してある銃。これが頼りだ。

それを見透かすようにバルトフェルドさんは

「ふ」

と笑った。

「こっちだ」

警備兵に促されて建物の中に入る。そこには長い黒髪の、レオタードみたいな服を着た女の人があった。

「この子ですの？アンディ」

「ああアイシャ、彼女をどうにかしてやってくれ。チリソースとヨ  
ーグルトソースとお茶を被っちまったんだ」

「あらあら、ケバブねー」

「あ……うーん……」

「さ、いらっしやい？」

「カガリ……」

「大丈夫よ、すぐ済むわ。アンディと一緒に待ってて」

「おーい！君らはこっちだ」

あたしたちは広い応接間に通された。

「僕あコーヒーには、いささか自信があってねえ」

「はあ……」

「まあ掛けたまえよ。くつろいでくれ」

「……」

しかたないからみんな腰を下ろした。

ん？暖炉の上に化石みたいなものが飾ってある。

「ん？それはエヴィデンスゼロワン。レプリカだけどね。実物を見  
たことは？」

「プラントに飾ってあるんでしょう？プラントは行った事ないから  
……」

「そうか。戦争になる前は、あちこちに移動展示もしたもんだが。  
見てないとは残念だ。しかし、何でこれを鯨石と言うのかねえ。こ  
れ、鯨に見える？」

「そうですねえ。羽を取れば鯨の化石に見えないことも無いかな……  
……」

「だろう。どう見ても羽根じゃない？普通鯨には羽根はないだろう」

「え……まあ……あでも、それは外宇宙から来た、地球外生物の存在  
証拠ってことですから……」

「僕が言いたいのは、何でこれが鯨なんだってことだよ」

「……じゃあ、何ならいいんですか？」

「ん〜、何ならと言われても困るが…、ところで、どう？「コーヒ」の方は」

「おいしいです。そんなに苦くなくて酸味があつて。キリマンジャロですか？」

「私はもつと焙煎して苦味出して酸味押さえたほうがいいかなあ」

「おおー！君らはなかなか通だねえ！」

あたしは紅茶に結構こだわる方けど、メイリンは確かにコーヒーにはかなりこだわる。

「君はどうだい？」

「え……あ、えーと」

「あ、君にはまだ分からんかなあ、大人の味は」

「ふふ、キラさんは手っ取り早くインスタントコーヒー飲んでたから」

「メイリンは我慢できなくてラボにコーヒーマーカー持ち込んだくらいよね」

砂漠の虎っていえば一応敵のはずだけどなぜか楽しく話が弾んだ。そのうちまた話題が鯨石になった。

「ま、楽しくも厄介な存在だよねえ、これも」

「……厄介、ですか？」

「そりゃあそうでしょう。こんなもの見つけちゃったから、希望って言うか、可能性が出てきちゃった訳だし」

「え？」

「人はまだもつと先まで行ける、ってさ。この戦争の一番の根っ子だ」

「んん……よくわかんないです。こんなもの無くても、確かな証拠なんかなくても、人はいつか宇宙に旅立ってくと思うんです。もつと遠くへ、知らない所へって」  
「ふつむ」

バルトフェルドさんはあたしの顔を覗き込んだ。

「君は非常にユニークだ」

「なんですかそれー。バルトフェルドさんも十分ユニークですよ」

そこに、アイシャさんがカガリを連れてやってきた。

「アンディー」

「おやおや！」

「へー！似合うじゃないカガリ！」

「あーほら。もう」

恥ずかしそうにアイシャさんの後ろに隠れているドレス姿のカガリが前に出される。

「あー…女…の子…？」

「くっ…キラてめえ！」

「あいやあ…だったんだよねって言おうとしただけだよ」

「同じだろうがあそれじゃあー！」

「くっはっはっは」

「失礼よお、女の子に」

「ふふふ……」

カガリも座り、コーヒーが出される。でも、本当に似合ってる。

「ドレスもよく似合うねえ。と言つか、そういう姿も実に板に付いてる感じた。」

「勝手に言ってる!」

「しゃべらなきゃ完璧」

「そう言っお前こそ、ほんとに砂漠の虎か?何で人にこんなドレスを着せたりする?これも毎度のお遊びの一つか!」

「カガリ!やめな!」

せつかくの和んでるこの雰囲気壊れるのが嫌だった。そして怖かった。

「ドレスを選んだのはアイシャだし、毎度のお遊びとは?」

「変装してヘラヘラ街で遊んでみたり、住民は逃がして街だけ焼いてみたり。ってことさ」

「いい目だねえ。真っ直ぐで、実にいい目だ」

「くっ!ふざけるな!」

「君も死んだ方がマシなクチかね?」

バルトフェルドさんの顔がきびしくなった。

「ルナマリア君、君はどう思ってるの?」

「え?」

「どうなったらこの戦争は終わると思う?モビルスーツのパイロットとしては」

やっぱり、知ってたか。

「お前どうしてそれを!」

「はっはっはっは。あまり真っ直ぐすぎるのも問題だぞお」

キラがカガリの手を引いて立ち上がる。でも、バルトフェルドさんのすぐ隣に座ってるあたしと、メイリンの顔を見て焦ってる。

「キラ、落ち着いて！」

「戦争には制限時間も得点もない。スポーツの試合のようなねえ。ならどうやって勝ち負けを決める？どこで終わりにすればいい？」

「あたしたち、ヘリオポリスが崩壊する前は大学の研究室にいたんです。色々研究したかったけど、全部はできなくて。その原因の一番は資金でした」

「つまり、これ以上やれば損をすると判断した時点で、理性が働き戦争が止まると？」

「本当にそうでなくても、そう思わせるだけでもいいんじゃないですか？」

「しかし、お互い意地もあるぞ。遮二無二続けようとする奴がいれば、どうするかね？」

「無理に続ければ、無理が出ますよ。結局お互いどうしようもなくなつての、しかたなくの妥協」

「……本当に、君はユニークだ。君のような者こそプラントにいて欲しかったがねえ。君が何故同胞と敵対する道を選んだかは知らんが……しかし、あのモビルスーツのパイロットである以上、私と君は、敵同士だと言うことだな？」

「コーディネイターであるだけで同胞と言ってくれるの？なら、なぜザフトは無差別に地球にNJを打ち込んだんです！あたしたちは地球で生まれたコーディネイターです。エイプリール・フル・クライシスで、家族も、知り合いも死にました。ナチュラルもコーディネイターも関係なく！」

「む……」

「あたしは歴史が好きなんです。史実には、敵味方の部下同士が馴れ合って戦争を終わらせた例もありますよ。よかったらそうします？」

「くっはっはっはっ。本当に、君がプラント人じゃないのが惜しいよ。ま、今日の君は命の恩人だし、ここは戦場ではない。帰りたまえ。話せて楽しかったよ。よかったかどうかは分からんがねえ」

アイシャさんがドアを開ける。

「カガリ君、そのドレスはあげるよ。ルナマリア君とメイリン君にも見繕ってあげたいが時間が無い。で、だ」

バルトフェルドさんはポン、とあたしとメイリンの手に袋を載せる。

「たぶん、それぞれの好みにあったブレンドのコーヒード。試してくれ。じゃ、また戦場でな」

あたしたちは宮殿を後にした。

あたしは複雑だった。人間として好意を抱ける人を敵にしなきゃいけないことに。本当に馴れ合えないかなあ。  
はあ。

## 虎狩り

数日後。あたしたちはとうとうここを突破するためにタルパディア工場区跡地へ向かうことになった。

補給もバナディーヤで充実したみたい。でも、よくザフトの正規品なんか手に入ったなあ。

いよいよ砂漠の虎と全面衝突か。ふう。

「なんだ遅いなあ。早く食えよ。ほら、これも」

「え！あ…あの……」

「ん。やっぱ、現地調達のもんは旨いねえ」

昼食はドネルケバブだった。あの日を思い出すなあ。

「フラガさん…まだ食べるんですか？腹撃たれたら腹膜炎起こしますよ」

「俺達はこれから戦いに行くんだぜ？食つとかなきゃ、力でないでしょ。拳銃で撃ち合うんじゃないんだ。戦闘機やられるような弾ぶち込まれたら終わりさ。ほら、ソースはヨーグルトの旨いぞお」

「あー同じだ」

「ん？」

「いえ……バルトフェルドさんもそう言ってたんですよ。ヨーグルトの旨いって」

「あ…んー！味の分かる男だな。ハムウ。けど、敵のことなんか知らない方がいいんだ。早く忘れちまえ。これから、命のやり取りをしようって相手のことなんか、知ってたってやりにくいだけだろ」

「馴れ合えないもんですかねえ」

「面白い事言うな、お嬢ちゃん。おー！」

「あー！」

爆音が響いた。

どうしたの？攻撃を受けたようじゃないみたいだけど。後でわかったけど、レジスタンスの作った地雷原が一度に爆破された音だった。

砂漠の虎も、一気に勝負をかけてきたのだ。

あたしたちは格納庫へ駆けた。

『スカイグラスパー1号、フラガ機、発進位置へ。進路クリアー、フラガ機、どうぞ！APU起動。カタパルト、接続。ストライカーパックはエールを装備します。エールストライカー、スタンバイ』  
レジスタンスは当てにならない。アーケエンジェルも全戦力を出す。  
あたしの番だ！

「ルナマリアホーク、レッドフレーム行きます！」

発進すると、いきなり目の前に戦闘ヘリが！とっさに盾をかばい、イーゲルシュテルンで反撃する！

……イーゲルシュテルンで破壊できる敵なんて初めてじゃないかしら。いてくれてありがとう！

そのままあたしたちは対空援護をし戦闘ヘリを落とす。

……！本命のバクウだ！何機？5機か！

「バクウが出てきたぞ！対空援護は十分だ！私たちはバクウに当たる！いつも通りやれば大丈夫だ！」

「はい！」

補給のおかげで銃突撃銃の弾幕も遠慮なく張れる。今回のバクウは口にビームサーベルのようなものがある。あまり近づけたくない。

あたしたちが牽制の弾幕を張ると、ストライクが上からビームサーベルをバクウに突き刺す！新しい攻撃方法も考えたようだ。あ、向こうでフラガさんがレセツプスにアグニを撃ってる。

……しまった弾幕を抜けて来た！相手の頭をトリケロスではたくと同時にビームライフル！また一機やった！

ストライクに向かおうとしたバクウが高くジャンプする。そこ！下腹を打ち抜く！MSでの射撃の腕が上がるとビームライフル好きになれそう！

気が付いたらバクウは全滅していた。

え！？アークエンジェルが思ってもいない方向から攻撃を受けた。伏兵？あたしたちがそれに気を取られた時、バクウとは違う、獣のようなMSがあたしたちの横に駆け抜けて来た！とっさに飛び退く！

「みんな、あれはたぶん砂漠の虎よ！」

「そうか。危険はあるが、アークエンジェルの方は艦の力を信じてみるか」

「ええ！バクウを全部倒してます。余裕はあります。虎狩の！」

「お願いね！彼は戦争を終わらせるのに必要な人だと思っの！」

ストライクが飛んだ！虎のようなMSも飛ぶ！

「行くわよ！キラ」

「ああ！ルナ！」

あたしたちも左右から追いかけて飛び、ストライクが攻撃を受け止

めている間に、下からビームサーベルで虎MSの翼を切り落とす！  
4機のMSがぶつかり嫌な音を立てる。

翼とスラスタを失った虎MSは機動力を大きく減じた。

あたしは地上から牽制する！ストライクが空中から頭を切り落とす！  
そこにブレーフレームがグレイプニールを放つ！見事に虎MSの足に絡まり、虎MSは横倒しになった！空中からストライクが虎MSの足を切り裂く！  
勝負は付いた。

あたしは虎MSの近くまで行くとMSを降り、虎MSのハッチを開けた。

「大丈夫ですか？バルトフェルドさん、アイシャさん」

「う…見事だ、ルナマリア君。だが、降伏などはせん！止めを刺せ！」

「降伏しろ、なんて言いませんよ」

同じように降りて来たアスカさんが言った。

「まあ私たち、まともな軍人じゃありませんし」

「なんだって!？」

「申し遅れました。私はルナマリア君の上司、本来の身分はモルゲンレーテ社のMS開発部主任のノブザネ・アスカです」

「……ようするに、会社員か」

「ええ。ただの単身赴任のサラリーマンですよ」

「くっははは！こいつは愉快だ！俺たちは正規の軍人でないものにしてやられたわけだ」

「同じ人間ですからね。軍人だろうがなんだろうが銃弾が当たれば

死ぬし、ナイフで刺されれば血が出ます。血が出るなら殺せる……と、話がそれましたね。実はルナマリア君がバナディーヤから帰った後相談を受けましてね。貴方が使える人材だと判断したんですよ」「ほう。俺をなんに使う気かね」

「オーブは、貿易立国でしてね。貿易立国には戦争とは悪夢なんですよ。たとえ自国が戦争をしていなくても。で、あなたがプラント側から戦争を止める役に立つと判断しました」

「……しかし、連合側はどうなんだ？つい先日モルナマリア君もいたがブルーコスモスの連中に襲われた。そんな連中が牛耳っている連合はどうする」

「あたしたち、ブルーコスモスの盟主と話したことがあるの」

「なんだって!?!」

「彼は、コーディネーターが作られるのを止めたいとは言ってたけど、今生きているコーディネーターをどうしようとは思っていないと言ってたわ。世界をコーディネーターに住みよいものにしたければ、頑張つて活躍しろ。宣伝はしてやるとも」

「……ふーむ。全面的に信じられる話じゃないが。まあ俺にどう動いて欲しいんだ」

「この場合は隠れて逃げてください。そして出世してください。力を持ってください。なんならクーデターを成功できるくらいの。そして戦争を止める方向にプラントを誘導してくればありがたいですな」

「……いいだろう！話に乗ってやる！」

あたしたちは虎MS（ラゴウと言うらしい）の頭を持ってそこを後にした。アークエンジェルは見事にあたしたちの期待に答えて陸上戦艦と駆逐艦を撃退していた。

次にバルトフェルドさんたちと会う時は、敵味方じゃなく会いたいな。そして、コーヒー談義でもしよう。



煌めく凶星』』

「へー、これが海かー？」

紅海に出たアークエンジェル。交代でデッキに出ていい事になった！

「あー！気持ちいい！」

「地球の海い！すんげー久しぶりー！」

「でもやつぱ、なんか変な感じ」

「うん、なんかすごいねー！吸い込まれそう」

「そっか、カズイは海初めてか」

「うん」

「ヘリオポリス生まれだったもんなあ」

「あれ？ルナは？」

「あたしも、内陸生まれだったし、オーブ本土にはあまりいなくてすぐヘリオポリス上がっちゃったから。なんか海って怖いなあ」

「だよなあ？砂漠にも驚いたけどさあ、何かこっちのが怖いなあ。

深いところは凄く深いんだろ？」

「ああ」

「怪物が居るかもよあ？」

「ええ！」

「何言ってるんだよ、ミリィ」

「あつはつはつは」

海にはザフトはいないと言うことでのんびりした日々だった。

そんなあたしたちに更なる朗報がやってきた！砂漠の虎が敗れてザフトの圧力が少なくなったため、アラビア半島で補給が受けられると言っのた！あたしたちは紅海を横切り、再び砂の梅へと向かった。

そうそう、ナタルさんとお茶する仲になったのだ。二人とも紅茶好きなのがきっかけだった。ナタルさんはあたしの入れる紅茶をおいしいと言ってくれる。伊達にはまっけた訳じゃない！ふふん。

ナタルさんとお茶してる時に思いついたことがあった。

「そう言えば……せっかく補給受けたのにスカイグラスパー一機空いてるんですね。もったいなくないですか？」

「それもそうだなあ。では希望者で適正をテストしてみるか。ああ、ルナマリア、お前も受けておいた方がいいぞ。どんな時に役立つかわからんからな」

シミュレーションでテストしたら、あたしたちパイロットはもちろんだけど、次くらいに適正があつたのはカガリにサイとトールだった。三人とも喜んでた。あたしは、愛読書の「大空のサムライ」シリーズを貸してあげた。

補給隊と待ち合わせたのはあるオアシスだった。

久しぶりに見る大量の真水！泳いでもいいよと言われたのでみんなで川に入って泳いだ。シャワーと違って気持ちいい！避難民の人たちも泳ぐ人もいたり、オアシスを散歩してる人もいる。いい気晴らしになってるようだ。

向こうでカガリとメイリンがエルちゃんって子と遊んでる。避難してた時に仲良くなったらしい。二人はそう言うことであたしと違って避難民の人たちと結構親しく話したりしてる。あたしも混ぜてもらおうと。

「補給隊長、マチルダ・アジャン中尉です」

「アークエンジェル艦長、マリユール・ラミアスです。今回の補給は本当にありがたいわ」

へえ。補給隊の隊長さん、きりつとしていてナタルさんに似てて美人だなあ。カズリが、あんな人が彼女ならいいよなあ、なんて言うてる。

きゃー！こつちにきた！

「素敵な恋人探してね」

あ、カズイさらつとかわされた。

「あなたたちがオーブのMSのパイロットね。喜んで。モルゲンレ  
ーテからあなたたちのMSにも追加装備が来てるわよ」

「わあ！ほんとですか？ありがとうございます」

どんなのだろう。わくわく。

それから、ひとつ意外な補給もあった。てっきり物資の補給だけだと思つてただけど、人員の補給もあったのだ。整備員と、なんとMSのパイロットが！

「私はジャン・キャリー少尉だ。よろしく！」

キャリー少尉はあたしたちと同じく地球出身のコーディネイターだそうだ。S型インフルエンザ流行の時ナチュナルのご両親を失つて一時プラントに移住していたらしい。

なんか共感感じるなあ。

その後プラントが戦争に突き進む中、それに反対してプラントを離れ、地球連合軍に参加し、あたしたちがMSに乗るまでは地球軍唯一のMSパイロットとして「煌めく凶星『J』」なんて異名も持つ

てるそうだ。すごい！

「ああ、ここはいいなあ」

「何がですか？」

「雰囲気やさ。コーディネイターとナチュラルが自然に協力し合っている。前にいた部隊の上官なんてコーディネイターへの偏見がすごくてね。閉口した」

「まあ、ここも最初はトラブルとかあったんですけどね」

「何事も最初からうまくは行かないからね。そうそう、ブルーコスモスの盟主に会ってずいぶん発破を掛けられたよ」

「ふふ、あたしたちもですよ」

「思っていたより、穏健な考えの男だったな。テロなんか起こす連中は末端の過激派か、それとも無関係の者がブルーコスモスと名乗っているのか……彼も苦労するな」

アズラエルさんは、本当に、あたしたちの活躍を宣伝してくれていた。補給と同時に持ち込まれた電子雑誌や新聞に、「頼もしき地球の仲間、地球を愛するコーディネイター」なんてアークエンジェルとあたしたちの事が書かれていた。コーディネイターを積極的に軍に登用するようにもなっているようだ。

「ちよつと恥ずかしいなあ。こんなに持ち上げられて」

「ん？ふふ、ルナマリアも恥ずかしいか。まあビクトリアが陥落したからな。軍も英雄を必要とするのだろう。ほら、フラガ少佐がい例だ」

ナタルさんも苦笑しながら読んでいる。

アークエンジェルはアズラエルさんに鼻肩されている、と思われるよう、実際今回の補給も彼の強い意向らしかった。キャリー

さんなんか、アークエンジェルに来るに当たって、パーソナルカラーの白に塗られたストライクの正式量産型の通称105ダガーを与えられていた。まだアラスカに実物は渡してないけど、第8艦隊と合流時に渡したデータを元に、ハルバートン少将がかなり強力にMS開発を推進しているらしい。でもやっぱりナチュラル用OSの開発に手間取っているようだ。

「もしオーブ政府から許可が降りれば力になれるのに」

カガリが残念そうに言った。あたしたちのナチュナルOSの改良はかなりのところまで進んでいるのだ。

モルゲンレーテから来た装備には待望のフライト・ユニットがあった！それからジン用の物をアストレイに付けられるようにした実弾兵器　バズーカやミサイルポッドをいっぱい、水中戦用のスケイルシステム。細かいところではストライクと同じようなアーマージュナイダー、強化型バッテリーユニットもあった。

期待されていることがわかる。ありがたいなあ。

名残惜しいけど、補給も終わってアークエンジェルはオアシスを出発した。アラビア海に出てインド洋を経てオーブに向かうのだ。だけど、中立を守っているオーブがアークエンジェルを入れてくれるだろうか？不安だけど、カガリは妙に自信を持って、考えがあるから大丈夫！と言う。信じてみよう！

## 海空戦

インド洋に出て、穏やかな日が続く。新しい装備を試したり、スカイグラスパーの訓練を哨戒をかねて交代でしたり。

『総員、第一戦闘配備！繰り返す！第一戦闘配備！』

いきなりそんな穏やかな日々は破られた。ザフトの空中戦用MSデインが襲ってきたのだ！

こんな海の真ん中で！？

フラガさんのスカイグラスパーが発進した。サイも発進するの？

「気をつけて！」

サイは親指を上げてこちらに見せながら飛び立っていった。

あたしもフライトユニットを付けて発進！キラはスケイル・システムを付けてお留守番だ。こんな海の真ん中にMSが進出してくるって事は母艦も近くににいる可能性があるからだ。

あたしは海上を這うように全速で飛ぶ！敵は海にぶつかる事を恐れてか、高い高度から撃つて来るだけだ。そんな弾当たらない！そこをスカイグラスパーが襲う！

アークエンジェルが離水する！？敵のイカみたいな水中MSは艦の下からミサイルを撃つてくる！キラが海に飛び込んだ！

あたしは気持ちを切り替えると、一旦アークエンジェルに向かいデツキを蹴ってハイジャンプ！一機を弾幕で包む。やった！撃墜！

降下するレッドフレームと、ハイジャンプする白の105ダガーが

すれ違う！キャリーさんは見事に敵の片腕を切り落とした！  
デインは撤退して行った。

アークエンジェルに降りると、キラも海から上がってきた。サイとフラガさんも着艦してくる。

「サイ！大丈夫だった!？」

「ああ！俺は貸してもらった本みたいに、敵が自分に攻撃してこな  
いかひたすらまわり見まわしてただけさ。おかげで首が痛いよ」

そう言っつてサイはウインクした。

食堂で健闘を称えあっていたところだった。

『総員、第一戦闘配備！繰り返す！第一戦闘配備！』

そのアナウンスと同時に、離水する感覚。ミサイルがぶつかったの  
か衝撃音がする。

「またあ？」

「よし次は俺の番だな！」

「トール、気をつけてね」

「わかってるつて！ちゃんとミリイのところに帰ってくるぞ」

「お熱いこつて！」

あたしとキラとトールは格納庫に走る。あ、アスカ主任だ。

「ルナちゃん、キラ君、海中は君たちに任せるしかない。よろしく  
頼むぞ。トール君、無理するなよ」

「はい！」

カタパルトから飛び出して下をみると、敵MS　グリーンがちよこちよこ海から顔を出したり引つ込めたりしながらアーケエンジェルにミサイルを撃っている。嫌なやつ！

海中にもぐる。海中戦は初めてだ。あれは……敵の新型機？動きが早い！ぶつかられて押し付けられる！飛び退くと魚雷を撃ってくる。この人、腕がいい！

キラから合図が来る。こいつから先にやるのね！うん、アーケエンジェルはミサイルの一発や二発でどうにかなる艦じゃない！

……？グーンの反応が消えた？

敵の新型機がまた体当たりしてくる！アーマーシュナイダーを取り出すと突き刺した！後ろからキラも来た！後ろからアーマーシュナイダーを突き刺すと横に回り込んで思い切り蹴り出した！離れると2機で魚雷を放った。

見事命中！今回もなんとかなった……

海から上がると、フラガさんが敵の潜水母艦らしきものをやっつけたそうだ。

トールも無事だった！

その日の晩はサイとトールの初陣を祝ってちょっとした宴会になった。

……くそう！オーブを目の前にして！

あたしたちは、奪われたXナンバー3機の襲撃を受けていた。相手

はグウルと言う物に乗って空中から自在に攻撃してくる。前に撃破したバスターも直っている。ちつ。

アスカさん、キャリー少尉ははエールパックを装備して、敵がアークエンジェル横・下には来ない様に気をつけてアークエンジェルを飛び回っている。下部はアークエンジェルの弱点だからだ。

「グウルを狙え！あれなら実体弾でも落とせる！」

「はい！」

フル・ウエポン装備と名づけた、ジンの実体弾兵器満載のこの装備！一気に解き放つ！

あはは！爽快！バスターとデュエルのグウルはこの飽和攻撃に耐えず見事爆散！バスター海に落ちる！

……！デュエル、艦に取り付く気！？

「やらせはせん！」

キャリー少尉が飛びかかり、見事にデュエルの右腕を切り落とすと海に蹴り飛ばした。

残ったイージスはこちらを攻撃しながらブルーフレーム　キラになにか呼びかけているようだ。

『キラ、キラ・ヤマトだろう！？いいかげんにナチュナルに誑かされてるって事に気づけ！』

「ふざけるなー！アスカさんやルナから聞いてたけど！君が本当にそんな事言う奴に成り下がってるなんて思いたく無かったよ！僕の両親を莫迦にするのか！？ニコルみたいな奴もいるのに！昔の君はどこに行った！」

ブルーフレームが残った兵器をイージスに向ける！あたしたちも攻撃をイージスに集中する！グウルは破壊されイージスは見事に海に落ちた！。ふう、一安心かな。これでオーブに入れる！

ふとまわりに目をやると、オーブの艦隊がこっちに進んでくる！

『接近中の地球軍艦艇、及び、ザフト軍に通告する。貴官等はオーブ連合首長国の領域に接近中である。速やかに進路を変更されたい。我が国は武装した船舶、及び、航空機、モビルスーツ等の、事前協議なき領域への侵入を一切認めない。速やかに転進せよ！』

どうなるんだろう？心配するあたしにカガリの声が響いてきた。

「こちらは地球軍艦艇ではない！ヘリオポリス崩壊時に多数のオーブ民間人が機密保持を理由に不当に拘束されていたところを、反乱を起こしてオーブの物として接收したものである！暫定的に艦長はカガリ・ユラ・アスハが勤めている！道を開ける！」

## 一時帰還

色々やり取りがあり、オーブ艦から人が確認に来たりして、結局アークエンジェルはオーブに入れる事になった。  
やった！

『指示に従い、船をドックに入れよ』

「オノゴロは、軍とモルゲンレーテの島だ。衛星からでも、ここを伺うことは出来ない、安心しろ」

「しっかし、カガリがお姫様だったなんてねー」

「お、お姫様なんて、そんな呼び方やめろ！カガリでいいんだカガリでー！」

「しかし、こんなふうにオーブに来るなんてなあ」

「ね、サイ。こういう場合どうなの？やっぱ降りたり、って出来ないのかな？」

「降りるって……」

「いや、作戦行動中は除隊できないってのは知ってるよ。けどさあ、休暇とか……ね、ノイマンさん？」

「可能性ゼロ。とは言わないがね。どのみち、船を修理する時間も必要だし」

「ですよねえ」

「でもまあ、ここは難しい国でねえ。こうして入国させてくれただけでも、けっこう驚きものだからな。オーブ側次第ってところさ」

「父さんや母さん……すぐ近くに居るのに……」

「会いたいかな？」

「そりゃもちろん会いたいですよ」

「ん……」

「まかせろ！なんたってオーブの艦って名目で入ったんだ！お父様に直談判してやる！」

「会えるといいな」

しばらくたって、避難民は最優先で降ろされることになった。よかった。無事に運べて。あ、エルちゃんが来る。

「ルナお姉ちゃん、今までありがとう、はいこれ」

差し出されたのは、折り紙で作った花だった。

「ありがとう！大切にするね！」

フレイもお父さんと艦を降りて行った。

「ルナたちだけ残していくのは心苦しいけど……早く降りられるように祈ってるわ。ニコルの事、お願いね」

「ありがとう。フレイも頑張ってる！」

フレイは本土の医科大学に進むそうだ。

避難民の皆さんが降りると、いきなり寂しくなっちゃった。

「マーズスイートチルドレン！アンド マーズスイートハニー！ただいま帰ったよー！ー！」

「お帰りなさい！あなた！」

「いいかげんにそれやめろよ親父！」

え？振り向くと、アスカさんが女の人と男の子と女の子の三人連れのところを駆けて行く。

紹介された。アスカさんのご家族だそうだ。奥さんのユーコさんに、シン君とマユちゃん。

仲良さそうなご家族だ。あたしも早くお父さんお母さんに会いたいな。  
顔に出たのか、君たちも必ずご家族に会えるようにする、とアスカさんは確約してくれた。

結局、MSの戦闘データ、あたしたちMSパイロットのモルゲンレーテ社への技術協力を引き換えに、アークエンジェルは修理や補給をされる事になった。

そして今までアスカさんの一任でモルゲンレーテ所属とされてたメンバーも、正式にそれが認められ、遡ってお給料が出る事になったのだ！ちょっとしたお金持ち！えへ。それにボーナスも！

あたしたちが改良していたナチュナル用のMSOS、それは今まで開発されていたものを一気に引き離し、ナチュラルでもかなりスムーズにMSを扱える物になっていたのだ。主任設計技師のエリカ・シモンズさんは狂喜乱舞していた。

「シモンズ主任。みなさんをご案内致しました」

「ありがとう。主任！よくご無事で！」

「いや、ルナちゃんやキラ君にずいぶん助けられたよ。それに我が国の量産MSもずいぶん進んでいるそうじゃないか。君の力だよ」

「こっつて……？」

「ここならアストレイの完璧な修理・調整が出来るわよ。いわば、お母さんの実家みたいなもんだから」

「こっち！みんなに見て貰いたいのは」

「あつ！これ……アストレイ？」

「そう驚くこともないでしょ？貴方もヘリオポリスでストライクを見たんだから」

「これが中立国オーブという国の本当の姿だ」

「カガリ！」

「これはM1アストレイ。モルゲンレーテ社製のオーブ軍の機体よ」  
「これを、オーブはどうするつもりなんですか？」

「どうって？」

「これはオーブの守りだ。お前も知っているだろ？オーブは他国を侵略しない。他国の侵略を許さない。そして、他国の争いに介入しない。その意志を貫く為の力さ」

「ああ……」

「もう、それだけではいけないと、私は思っているがな」  
「え？」

『起動電圧正常。システム……』

「アサギ、ジユリ、マユラ！」

「……はい！」

「あ！カガリ様？」

「あら、ほんと」

「なーに、帰ってきたの？」

「悪かったなあ」

「訓練始めて！みんな！」

……

「ずいぶんスムーズに動くようになったな」

「これも、主任が改良して持ち帰ってくれたOSのおかげです。キラ君、あなたには、そのサポートOSの完成をお願いしたいの。ルナマリアさん、あなたは実戦から得た経験でM1アストレイに直すべき点や取り入れてもらいたい事があればアドバイスしてちょうだい。短期にできる事ならすぐアストレイにもフィードバックするわ」  
「アスカさんには聞かないんですか？」

「主任は、アストレイには乗ってなかったから。それに主任は主任でストライクのデータをフィードバックする作業があるのよ。今までの開発経過も聞いてもらって指揮してもらわなくちゃ。大忙し」

翌日、マリユールさんが言った

「家族に会えるの?」

「ええ。状況が状況だから、家にも帰してあげられないし、短い時間だけど、明日午後、軍本部での面会が許可されました」

「あー」

「わーいやったー!」

「やった!よかった!」

「ツール、どうしよう!」

「どうしようってミリィ、今から泣くなよ」

「だって嬉しくって…会えるのよ?」

「元気かなあ?」

「細かい予定は明日通達….: ちよつと、聞きなさい!」

「お姉ちゃん、どうする?あたしは単なるモルゲンレーテの社員だから、家に行つてくれるよ」

「家つて言つてもねー。新しい家でしょう?今まで持ってたものはヘリオポリスでぱーになつちやつたし。メイリン、艦を降りる気はないの?」

「お姉ちゃん残して降りるわけないじゃん。じゃあ、お姉ちゃんに好みの紅茶でも買って来るよ」

「ありがとう….:」

「ちよつと、お姉ちゃん、なに泣いてるのよ」

「だって、心細かつたんだもん。メイリンいなくなるかもって思つてて」

「もつ、お姉ちゃんったら」

ぎゅ　メイリンがあたしを抱きしめる。それはとても心地よかった。

「母さん！父さん！」

「ルナ！よく無事で」

翌日、軍本部で両親と面会した。みんなもまわりで両親に会って泣いたり騒いだりしてる。

「本当に……MSの一機は主任が乗ってたそうじゃないか。父さんも替わってやりたいぞ」

「新しい家はいいところをもらったのよ。早く一緒に住みたいわ」

あたしは、思っていた事を話した。オーブの役に立ちたいと。

「……立派になったなあ」

「この子つたらまだ子供なのに」

「何か、MSでして欲しい事があつたら遠慮なく言いなさい。無理押ししてでもかなえてやる」

「メイリンに、ルナの好物とか色々持たせるから。身体に気をつけるのよ」

短い時間だったけど、充実した時間だった。戦争が終わったら、きっと帰ってこよう。ここへ。

さあ、あたしの仕事も終わらせなくちゃ！

みんなで話し合ってアストレイの改修案を出したのだけど、その時、長い黒髪の人を紹介された。ロンド・ギナ・サハク様だって！ギナ様には、ゴールドフレームの右腕をよく持って帰ってきてくれたな、と背中をばしばし叩かれた。

みんなで考え合って、アストレイ（青・赤）にはフィン・スラストアームを肩に装着し、脚部の強化、腰部の追加バッテリーバック、またキャリーさんの105ダガーと同じようにラミネート装甲が張られる事になった。アーマーシュナイダーに対ビームコーティングを施される。なんとビームサーベルも受け止められるらしい。

あたしは経験から、デインと同じように空中を自在に飛びまわられるようにしたかったのだけど、それは技術の発展待ちになりそうだな。残念。

そうそう。乗せてたけど何にも使わなかったミゲルの乗ってたジンを降ろし、予備に、ストライクの技術や話し合いの結果も取り入れ改良するM1アストレイを積む事になる。これから突貫作業で改修するそうだ。頭が下がる。ブリッツは、ギナ様が参考にしたいと言っただけで行った。

あーあ、いい加減疲れた。

ジューズでも飲もうと自動販売機のところ行ったらキラがいた。あ、カガリも来た。……自然にキラと腕組むんだな！。

「や、おふたりさん」

「やあ、ルナ。OSの方は大体終わっただし適当にのんびりしてるんだ。ルナの方はまだ？」

「ルナ……あ……違うんだこれは！」

あーあ、腕振りほどいちゃった。

「えー、カガリ、何が違うの〜？」

「とにかく違うんだ！」

顔を真っ赤にしてカガリったら走って行っちゃった。かわいいー！

「急にどうしたんだろ、カガリ？」

キラの鈍感！

……なんとも驚いたことに。アークエンジェルは本当にオーブの物になりそうだ！

その代わりにナチュラル用OSとかが連合に渡ったらしい。地球軍にとってはアークエンジェル一隻よりもその方が助かるみたい。今まで生産だけはしてきたMSがいきなり使い物になったと、ビデオレターでハルバートン少将がお礼を行って来た。カガリの護衛の人キサカさんに聞いたら、これもハルバートン少将始めアークエンジンクルーがあたしたちと親密な関係を築いたからだ、と言うことで結構権力も上がっているみたいだ。

アークエンジェルは改装を施された。弱点の下部にもゴットフリートが一基追加された。Xナンバーと戦った戦訓から、ビーム機銃が全体で26基増設された。イーゲルシュテルンも12基に増設されている。

そして、アークエンジェルは義勇兵としてアラスカへ向かう事になる。氏族長会議ではかなり議論が紛糾したとも聞く。

マリューさんやサイたちは地球軍からアークエンジェルへ派遣と言う形だ。何も変わらない様だけど、建前って奴だそうだ。

アスカさんも付いて来てくれる事になった！

「でも、いいんですか？MS開発の責任者でしょ？」  
「君たちを巻き込んでしまった責任があるからね。もう一人くらい、私の代わりになるようなパイロットが派遣されるまで、最低アラスカまではこちら一緒にさせてもらおうよ」

本当に心強い！

出航間もないある日フレイがジョージさんと訪ねて来た。

「どうしたの？フレイ」

「うふふ、嬉しいことがあるのよ。あ、私にとってだけど。あ、ニコル！」

「フレイさん！」

もうすっかり怪我也治ったニコルさんが連れられてきていた。

「喜んで！パパが地球軍に働きかけてくれたのよ！オーブを離れない限り、戦争が終わるまで自由にしていいんですって！」

「ふふ。権力と言うのはね、君、普段きちんと振舞っておけば、多少のわがままは許されるのだよ。君の戦争はこれで終わりだ。まことにおめでとう！」

「い、いいんでしょうか？捕虜の身でこんな……」

「ニコルさん、おめでとう！昔の話だけど、オーブのルーツの日本と言う国は、捕虜をひとつの街を自由に歩かせたり、コンサートを聞くことも許していたそうよ！オーブはいいところだからゆっくり羽を伸ばしてね」

「ありがとう、ありがとう、みなさん。本当に……」

ニコルさんはフレイと一緒に退艦して行った。

この戦争も、ただ破壊するだけじゃない。対立する陣営であつても人と人の心をつ結びつけたりするんだ。あたしは嬉しかった。

## アンブッシュ

『総員、第一戦闘配備！繰り返す！第一戦闘配備！対潜、対モビルスーツ戦闘用意！』

網を張られていた？

Xナンバーの3機がグウルに乗ってやってきた！バスターの腕、また直ってる。しつこい！

アークエンジェルは煙幕を張る！

フラガさんとサイがスカイグラスパーで出る！

「サイ！上空支援だけしてりゃいいからな」

「はい！フラガ少佐！」

キラはスケイルシステム付けて待機している。デッキに出ているのはアスカさん、キャリー少佐、そしてフルウェポンのあたしだ。

「相手は密集している、今だルナちゃん！」

「こちらサイ、相手の座標と射撃データを送る」

「はい！」

ミサイルポッドを全て発射する！ちっ相手も学習したようだ。みな素早く移動し、グウルを破壊されて下に墜ちていったのはバスターだけだった。

「はあああああ！」

イーエル装備のキャリーさんがハイ・ジャンプする！デュエルに飛び蹴りを食らわす！さすが！デュエルも下へ墜ちて行った！

残るはイージス！あたしはバズーカを打ちつくしたけど、墜ちない。キャリーさんがデュエルのグウルを奪ってイージスと撃ち合ってる！あたしとアスカさんはイージスに向けて弾幕を張って支援する！やった！グウルを貰った！

イージスは近くの島へ墜ちていった。

アークエンジェルはすかさずその島へミサイルを打ち込んだ。爆煙が晴れた時には、彼らの姿は無かった。

「いやーもう最初はビビったよ。発進してすぐ一発目のビームが来た時は。けど、ああいうのもシミュレーションやってたからさ。もう咄嗟にステイック引いて、こっ……」

「あっはっは」

「いやあでも凄かったよ。あれはほんと。いつの間にあんなことできるようになったんだか。一回目はただ飛んでるだけだったからなあ」

「サイ、大分やってたもんねえ。シミュレーション」

「トールだって大分シミュレーションやってるだろ。ミリイだってオペレーター凄い出来るようになったし。カズイだって」

「まあな」

「あは」

「俺達だってもうお客さんじゃないんだから」

「流石に慣れたわよねえ。でもサイは調子に乗りすぎ！」

「ええ？」

「そうよ。最初の内はなんでも、緊張してるから事故少ないんだって。ちよっと慣れた頃が一番危ないのよ。気を引き締めなさいよ。

サイもトールも」

「了解、ルナ」

次の日の夜明け頃だった。

『総員、第一戦闘配備！繰り返す！第一戦闘配備！対潜、対モビルスーツ戦闘用意！』

あー、せっかく非番で寝てたのに！  
キャリーさんはもう出撃して、デュエルを叩き落していた。あたしも負けない！

「バスター！いいかげんに墜ちろー！」

相手の射撃をかくぐり、近距離からミサイルポッドを放つ！バスターは下に墜ちていく。それを追ってビームライフルを乱射する！新バッテリー＋追加バッテリーがあるこぞできる技！バスターは足を撃ち抜かれ、地上に転がった。あたしは華麗にアークエンジェルに着地！

「直上にイージス！ルナちゃん！」

「はい！」

アークエンジェル、ストライクとレッドフレームで弾幕に包み込む！

…！MA形態に！

「避けるー！」

イージスが放ったスキュラがアークエンジェルに当たってしまった！艦が大きく揺れる！

……？色を失ったイージスから誰か脱出した？

あたしのまん前に落ちてきたイージス。白い光が広がって……

## アラスカ

「知らない天井だ……」

「お姉ちゃん！気が付いたのね！」

「あ、メイリン……あたし、どうしたの？」

気が付いたら、病室だった。

あちこちに包帯が巻かれている。痛み止めでも打たれているのか、感覚が鈍い。

「お姉ちゃん、イージスの自爆に巻き込まれたのよ」

「あ……ごめん、思い出せない……他の人は、無事だったの？」

「アスカさんや乗組員に何人かが軽傷負ったけど、大丈夫よ」

「そう……よかった」

「もう、アラスカの防空圏に入ったし、安心してのんびりしてね」

「安心なのね……ありがとう」

あたしはまた眠りに付いた。

次に目を覚ました時、そばにはフラガさんがいた。

「あ……」

「よう、お嬢ちゃん」

「あれから、何か変わったことは？」

「うん、無事にアラスカのドッグに入ったよ」

「レッドフレームは、どうなったんですか？」

「……自爆の衝撃浴びて、PS装甲でもなかったからね。またオーブに行かなきゃ直らんらしい」

「……連れて行って」

「え？」

「格納庫に、連れて行って」

フラガさんの肩を借り格納庫に着くと、見慣れない整備員たちがいた。アラスカ基地の人たちだそうだ。

彼らは、ストライクと、捕獲されたと言うバスターに取り付いていた。

レッドフレームは、格納庫の片隅に置かれていた。

ぼろぼろになった装甲が痛ましい。

「ありがとう……あたしを守ってくれて」

「大丈夫か？ルナ？もうちょっと寝ててもいいんじゃないか？」

「大丈夫よツール。もう起きられるようになったし。そうしたら寝ているとね、却って治りが遅くなるんだって」

「それでも最初だからな、入り口まで持って行ってやるよ」

「ふふ、じゃあお言葉に甘えて」

「今度の捕虜、イージスのパイロット？」

「いや、奴は島の奥にうまく逃げ込まれちゃった。のんびりしてる搜索してる時間もなかったしそれっきりさ。捕虜はルナが倒したバスターのパイロットでディアッカ・エルスマンと言うそうだ」

ふーん。最初は最悪だったけど、あたしのプラントに持っていた印象を変えてくれたミゲル。ナチュラル、コーディネイターに関り無く優しかったニコル。そう言えばアラスカで補給された雑誌に、ニコルがオーブでコンサートを開いた事がちょっとした好意的な記事になっていた。元気でやってるようで嬉しい。今度の捕虜はどんな

人だろう。

「食事です」

「ああ、ひよっとしてルナマリア様でありますか！わざわざありがとうございませす！」

「え？」

「手ずから運んでくださるなど、このディアツカ、恐縮の極み！」

なんなの？この変な人？

訳は帰り道にツールが教えてくれた。

キラがディアツカに、ミゲルにあたしがした事を詳しく教えたんだそうだ。

「じゃあ、あれ、怯えてた訳？失礼ね！もうしませんよ！」

「あはは」

「うふふ」

あたしが起きれるようになるのを待っていたかの様に、いや、待っていたんだろう。アスカさん、キラにあたしはアラスカの訓練教官や技術士官に呼び出された。

「やあ諸君、掛け給え」

「は！」

「我々は、民間人であつた君たちがここまで戦い抜いた事に深い関心を寄せている。教えてくれ給え。どうやって戦い抜いたのかを」

「では、レディーファーストでルナマリア君から」

「は、はい。最初のヘリオポリスの戦いの時は、無我夢中で。護身

術習ってたからアーマーシユナイダーで目潰しかけて、投げ落としたり、相手は気絶してました。それからしばらくは、ビームライフルはバッテリー切れが怖いのでジンの突撃銃を使って牽制しながら逃げ回ってました。ビームサーベルもバッテリーの消費が大きいのと、刀を使った経験がなかったのでめったに使いませんでした。相手を倒す時は基本的に何機かで弾幕張って倒して……」

あたしたちが解放されたのは数時間後だった。

でも、皆真剣にあたしたちの話を聞いてくれた。話し甲斐があった！アークエンジェルに戻ると、色付き眼鏡をかけた黒人青年がみんなとなごやかに話していた。

「あ、みんな。シャムス・コーザ少尉よ。アークエンジェルに配属されてきたの。ルナと同じ年だって！シャムスさん、うちのMSパイロットたちです」

ミリイが紹介してくれた。あたしたちは自己紹介をした。

「俺は新しく配属されたバスターダガーのパイロットのシャムス・コーザだ。よろしく」

……急に態度がそつけない。顔も険しい。なんだろう？

「……気にしないでくれ。これまでコーディネイター憎しで育ってきたもんでね。あんたたちが空の化け物どもと違っていて事は教えられてるし、頭じゃ理解してる。……だが、時間がかかる」

そう言うと、彼は向こうへ行ってしまった。

そうだよねえ。そういう人もいるんだよね。

「やだ、ルナ、泣かないでよ」

いつの間にか涙が出ていた。

「あ……ちょっと、アーケエンジェルに慣れすぎたみたい。……でも、シャムスさん、時間はかかるけどって、言ってくれたんだよね？」

「うん、そうだよ！ルナ！時間をかければって言ってくれたんだよ」  
いつか、シャムスさんとも笑顔で話せる。そんな日が来ることをあ  
たしは信じる。

## アラスカ防衛戦

『総員、第一戦闘配備！繰り返す！第一戦闘配備！』

いきなり警報が鳴った！いつもより反応が鈍かったのは否めない。怪我のせいもあるけど、アラスカでまさか、と思ったのだ。

「キャリアーさん！ザフトが攻めて来たってほんとですか！」

「ああ！……もしかしたら、軍上層部は知っていたのかも知れん！『次はパナマ』の噂が立っていた割にはMSの配備が多すぎる！」

後ろからシャムスさんも走ってくる。あたしは予備機体だったM1アストレイで出る。く、怪我がつづく。

M1アストレイはPS装甲で損傷が少なかった右腕 トリケロスだけは修理して取り付けたけど、レッドフレームほど空中を飛べない。地上で戦うしかない。

「シャムスさん、背中、預けます！」

「……わかった！」

不機嫌な声だけど、シャムスさんははっきり答えてくれた。

アークエンジェル隊は遊撃任務だ。守りの薄い所へ行つて、守る。

スカイグラスパー、そしてブルーフレーム、ストライク、105ダガーが出撃して行く。地上の安全を確かめて、あたしたちも出撃する！

長く戦えるようにあたしはフル・ウェポンだ。

！救援要請が入った！

「ただちにそちらへ向かう！行きましよう、シャムスさん！」

「了解！」

そこでは、ストライクダガーの一団が数機のバクウに翻弄され、噛み破られようとしていた。

「救援到着！落ち着いて！複数で一機ずつ着実にしとめるのよ！」

見本を示すように敵一機に弾幕を張る。シャムスさんが併せてレールガンで止めを刺す。シャムスさん、射撃うまい！  
落ち着きを取り戻した部隊は、バクウを駆逐していく。

バクウの後方からジン部隊がバクウを支援しようとする突撃銃を放ってくる！こちらも！ミサイルを放ち面で制圧する！シャムスさんも合わせてミサイルを放ってくれる。ジン部隊は混乱する！

「今よみんな！」

牽制にあたしはジン部隊全体に銃弾をばら撒き続ける。ストライクダガーとバスターダガーが着実に相手を仕留めて行く

……

また救援要請だ。もう何回目だろう。

ザウトと水中MSの集団が上陸している！数が多い！こちらの戦車も善戦してるけど押されてる！

ザウトの火力は結構充実している。旧式とは言え数が多いし長距

離砲戦じゃ不利か？

「あたしたちが突っ込んでかき回す！戦車隊のみなさんは援護射撃  
お願い！」

飛び上がって空中からミサイルと突撃銃で牽制しながら突っ込む！  
ザウートの射撃をかくぐり、ビームサーベルで切り裂く！シヤム  
スさんもザウートに切り込んでいく。混乱したザウートの群れにこ  
ちらのリアガンタンク部隊が止めを刺していく。グーン……水中  
じゃ翻弄されたけど、地上じゃ！鴨よ！ゾノ、近づくとクローで攻  
撃してくる。少しは強いわね。でもやっぱり地上じゃ！あたしはク  
ローの攻撃をトリケロスで防ぐと同時に胴体にビームライフルをぶ  
ち込む！

また救援……

その対空砲陣地はデインに襲われていた。くっ、数が多すぎる！  
突撃銃はもう弾切れ。ビームライフルに切り替える。もう、一旦ア  
ークエンジェルに戻らないと！

その時空を飛んできたMSが巨大な球をデインに向かって擲つ！数  
機が撃破される。機体識別……レイダー。見たこと無い機体だけど  
味方の機体！助かった！デイン部隊を壊滅するのを確認してアーク  
エンジェルへ戻る。アークエンジェルには他のMS隊も補給に訪れ  
ていてマードックさんに声をかける暇も無い。手早く整備・補給を  
終わるとまた出撃していく。

……もう何度帰艦、出撃を繰り返したのか。日暮れ近くになり、急  
に、潮が引くように、ザフトは撤退して行った。

やった！あたしたちは、アラスカ防衛に成功したのだ。

アークエンジェルに帰艦したあたしは、コクピットから降りた後、  
格納庫の壁に寄りかかって座り込み、しばらく立てなかった。それ

ほど疲れていた。見るとほかのパイロットも座り込んでいた。シヤムスさんがむっつりした顔で親指を立ててこちらに見せる！あたしも笑顔で親指を立てた！

被害は大きかった。せつかく配備したストライクダガーを始めとするMS隊の40%が撃破されていた。航空隊も同じくらいの損害だ。対空陣地・トーチ力等も半分以上がやられたらしい。

アークエンジェルにも被害が出た。あちこち壊れて、半数以上の火器が使用不能、乗員にも死亡者が出た。アスカさん、キャリアさん、トールも怪我をした。

アスカさんは大腿部骨折で当分MSに乗れないと言う。トールも、スカイグラスパーが被弾して、墜落ぎりぎりのところでアークエンジェルに着艦した。

それでも、あたしたちは勝ったのだ。

「ルナ君、愚痴を聞いてくれないか？」

デッキで星空を見ながらぼーっとしてたらキャリアさんに話しかけられた。キャリアさん包帯姿が痛ましい。

「なんでしよう？あたしでよければ」

「……私は、殺して殺される、憎しみの連鎖を広げたくないのだ。相手を殺さず行動不能にする。そんな戦い方を旨として来た。だが、連合はそれを許してくれんのだ。私が行動不能にした先から、止めを刺していく。私はどうすればいいんだ……」

キャリアさんは本当に苦しそうに見えた。

「キャリーさんは、今までずっと地上だったんですね。地上なら  
そう言う戦い方もできるのかも知れない。でも、宇宙では……あた  
し、ヘリオポリスが崩壊してアークエンジェルに連絡が取れるまで  
とても不安でした。もし宇宙で行動不能にされたら、空気が無くな  
っていき恐怖を感じながら漂ってなきやいけない。味方が勝って、  
搜索してくれればいいけど、負ければそんな事望めません。いつそ  
一思いに殺してもらった方がましです。海上の戦いもそうだと思います。  
沈んで行く機体がいつか圧壊する恐怖感しながら沈んで行く  
んですよ？空中の敵なら、地上に叩き付けられた衝撃で死んじゃう  
かも知れません。それに、行動不能にしたと思った相手にやられた  
らどうするんですか？割り切らなきや、だめですよ！割り切らなき  
や、いつかキャリーさん死んじゃいますよ……」

「ル、ルナ君、泣かないでくれたまえ」

「あ……ごめんなさい。最近なんか涙腺弱くて。でも、あたしキャ  
リーさんに死んで欲しくないんです。ううん、他の仲間の誰にも。

あたし、仲間を助けるためなら、顔の見えない敵なんかいくらでも  
殺せる。……キャリーさんから見たらひどい人間ですね、きつと」

「いや、それが普通の人間なんだろう。私はプラントにも居住して  
いたから、理想を追いすぎていたんだろうな、きつと……ありがと  
う。気持ちを吐き出したら楽になったよ」

「……ほんとですか？」

「ほんとさ」

ぼむ。キャリーさんは、あたしの頭に手を置いて微笑むと、中に入  
って行った。

あたしは、本当にキャリーさんの役に立てたんだろうか？キャリー  
さんは戦い方を変えるだろうか？不殺を貫くだろうか？わからない。  
ただ、これからもキャリーさんが無事であることをあたしは祈った。



## 再びオーブへ

「なんだこりゃあ?」

格納庫でMSの整備をしていた時だった。地球軍からの補給物資にそれは混ざっていた。

「オーブのアスカさんは当分MSに乗れないらしいですね。地球軍としてはこのさいフラガ少佐にストライクを操縦してもらいたいと考えています。そのための、ちょっとした贈り物ですよ」

「MSへの機種転換か。アーマー乗りとしちゃ複雑だが、やってみるか!しかし、これ宇宙用だろ?」

「地球軍だつていつまでも地球で戦っちゃいけませんよ!反撃に宇宙に上がった時に役立ててください!」

それは、フラガさんにしか扱えない、ビームガンバレルストライカーだった。

応急修理を終えると、捕虜を降ろしてアークエンジェルはオーブに向かう。心配していたものの、行きと違って帰りは何もなく。きつとザフトもアラスカ攻防戦で大きな傷を受けたのだらう。

アークエンジェルは静かにオノゴロ島へ入港した。

アスカさんはここで退艦する事になる。MSの操縦なんてとんでもない物に巻き込んでくれた人だけど、もしアスカさんがいなければ、あたしは今まで生きていないかも知れなかった。

「アスカさん、本当にお世話になりました」

「こんな身体じゃ操縦もできないからね。君たちを残していくのは

心苦しいが……それは、よりよいMSを作る事で勘弁してもらおう。  
いい物ができたら、最優先で君たちにまわすよ」

「ふふ。期待してます。アスカ主任ならできますよ。早く怪我治してくださいね」

壊れていたレッドフレームも修理のためにモルゲンレーテに入る。  
とりあえずあたしが怪我を負った戦訓からコクピット周りに二重装甲としてフェイズシフト装甲が組み込まれるそうだ。直るのが待ち遠しい。

マリューさんたち艦の幹部と、あたしたちオーブの乗組員に、招待状が届いた。カガリの誕生日パーティだって！

「あー、パーティだって！アスハ主催だぞ！盛大だろうなあ。どんなの着てきやいいんだ、ミリィ」

「男は楽でいいわよ。きちんとしたスーツでも着ていけば。女は大変なのよ」

「そうよね。とりあえずお給料ももらった事だし半舷上陸の時に選びにいかない？」

「ふーん、僕と同じ誕生日」

「へえ、キラと同じなの！？縁があるね。キラから何か些細な物でもプレゼントしたら喜ぶよ、きつと」

「そうかなあ。どんな物がいいんだろう」

「身に着けるものとか、いいかもしれないね」

「しかし、女性の身に着けるものなんてわからないなあ。ルナ、選ぶのに付き合ってくれない？」

「いいわよ。ミリィ、一緒に服も選んじやいましょうよ」

「いいわね。そうしましょ」

半舷上陸してのショッピングの前に、あたしたちはせっかくだから

それぞれの家へ行つて来た。まだ家族が住んで間もないけれど、そこは確かに家族の匂い、みたいなものが漂い始めていた。あたしは、行つて来ます、と言つて新しい家を出た。行つて、来る。うん、また帰つてくる。

「お待たせー」

「この間みたいに家族に会っただけじゃなくてさ、自分の家つて落ち着くよな」

「うん、俺なんか自分の部屋になつた部屋ででごろごろ転がりまくつたよ」

「やだあ、トール。犬の臭い付けみたい。ふふ」

「でも、そうね。まだあたしたちは住んだ事もないのに不思議ね」

……

「まだかよー。いいかげん付き合つての疲れる……」

「いったい何軒まわるのさ……」

「情けないわねー。別に荷物持ちもさせてないでしょう？」

「そうよ。アス八家のパーティーなのよ？ そんじよそこらのパーティーじゃないの！ いい加減な物で妥協したら一生後悔する！」

「へいへい」

買った物は、結局あたしはタイトな感じの斜めの裾にフリルのついた赤いロングドレス、カガリがバルトフェルドさんにもらつたようなデザインの。あたしはあれを見た時すっかりデザインが気に入っていた。メイリンは同じようなピンクのドレス、ミリィは白と青のストライプでスカートが内側が青、外側がフリルの付いた白で海の波を思わせるようなドレスを選んでた。

キラからカガリへのプレゼントは、指のサイズがわからなかったから無難にミャンマー産のきれいな半透明エメラルドグリーンのは

イの勾玉にした。

パーティーは豪勢だった。

「さすがね。アス八家の娘の誕生日パーティーだけあるわ」

「うん、ちよつと気後れしそう」

そんなあたしたちをカガリが救ってくれた。

「お前たち！よく来てくれたな！」

カガリは腰から下にフリルが何段もついた緑のロングドレスだった。

「私もこんな服着たくないんだけどな。マーナ　侍女がうるさくて」

「似合ってる。見違えるわよ」

「ええ。こんな姿も板についてる」

「からかうなよお」

「ふふ、からかってなんかいないわよ。そうだ、ほら、キラ」

「う、うん。誕生日おめでとう！これ……僕から。つまらないものだけど」

「わ、私にか？」

カガリは箱を開けた。

「……ありがとう、きれいな勾玉だな」

カガリ、ちよつと頬が赤くなって、ほんとに嬉しそうだ。

「あ、ちよつと待ってる！」

そう言うと、カガリは部屋を出て行って、しばらくして戻ってきた。カガリは、キラにひものついた赤い石を渡した。

「これ、ハウメアの守り石だ。お前、あぶなっかしいからな。守ってもらえ」

「ぼ、僕に？」

「そうだ！」

「ありがとう、嬉しいよ」

キラもにっこり笑った。

その後はみんなでダンス踊ったり、久しぶりにフレイにも会えたりして、気楽に楽しく過ごせた。

パーティが済んで一週間もたった頃だった。あたしたちに驚くべき知らせが入った。地球軍が保障占領しているパナマのマストライバーがザフトによって破壊されたというのだった……

## 信念の人

パナマのマストドライバーが破壊されたと言う知らせは、あたしたちオーブ国民を震撼させた。連合は、オーブに更に協力を求めてくるだろう。連合への加入も促されているかもしれない。連合には、もう、オーブのマストドライバーを使うかビクトリアを奪還、あるいは苦勞して新たなマストドライバーを作るしか道は無いのだ。国民は不安に思っている。アークエンジェルの乗員はもちろんだ。

氏族長会議も紛糾しているみたいだ。あたしたちは、意見を求められるかもしれないと言うことで、隣の部屋に詰めている。

扉の向こうから、会議の様子が洩れ聞こえてくる。

「……これ以上、オーブ国民に不安を強いるのは常識にも外れるのではないか。オーブ国民は不安に耐えかねているのだ」

「『他国に侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入せず』これは我国の理念だ。それを理解しようとしないう事なかれ主義者に迎合する必要はない。そもそも犠牲なくして大事業が達成された例があるか！」

「その犠牲が大きすぎるのではないか、と国民は気づき始めたのだ、ウズミ」

「どれほど犠牲が大きくとも、たとえオーブ国民が死に絶えたとしても、守るべき理念がある！」

「そ、それは政治家の論理ではない！」

「我々には崇高な理念があるのだ。オーブ国民のみの利益にこだわって、その大義を忘れはてるのが、はたして大道を歩む態度と言えるのか！」

ウズミ・ナラ・アスハは40代後半の、堂々たる髭を持つ男性で、その声には魅力的な響きがあった。

それだけに、あたしが感じた危険は一段と大きかった。

彼こそ、安っぽい英雄願望に足首をつかまれているのではないか

中立厳守は、一時的に戦争にまきこまれずにすむことはできて、それによって人々を、少なくとも連合国民の過半数を納得させる事は出来ないだろう。

納得できないということ。まさしく、それが問題なのだ。

仮に中立を厳守し、オーブが連合に対して助力をしなくなった時、何がオーブに残されるのか。

連合との関係がゼロに戻るだけ？表面的にはまさしくそうだが、その底流には憎悪と怨恨が残る。

それは火山脈のように、岩盤の圧力で呻吟しながら、ほどからず爆発して、地上を溶岩で焼き尽くすだろう。

岩盤の圧力が大きいほど、噴火の惨禍もまた大きいはずである。

そのような結果を生じてはならず、そのためには中立厳守の見直しを進めなくてはならない。

あたしの考えは強硬に過ぎるのだろうか。

そうかもしれない。だが、ウズミ流の甘さを受容しようとは、あたしは思わなかった。

「もう我慢ならん！」

カガリが、扉を開け放ち、会議室へ入って行った。

「お父様！それは間違っている！」

……

「国民なくして国の理念も無い！理念以前に、国民の安全を守るのが国家の義務だ！」

「もし連合の頼みを断れば、今まで築いて来た連合との絆を無にするばかりか、攻め込まれる可能性すらあるのです！今ならば、それを防げるどころか、最大限にオーブも利益を得られる！中立厳守とは、国を焼いてまで守らねばならぬ事ですか！」

「戦争を厭うなら、一方に味方して早期に終わらせるといふ道もある！連合のあり方が気に入らないのなら、いつそ内に入って内部から改革する手もある！それともお父様はオーブが一旦連合に入ってしまったええなにもできない、変える自信がない、とおっしゃるか！」

「もしオーブが連合に付いたとしても大義はオーブにあります！エイプリールフル・クライシスで、小なりと言えど被害を受けたのです！オーブは！中立だったにも関わらず！」

カガリ、お父様のウズミ様を相手に、がんばっている。それをきっかけに会議は喧々諤々となり、聞こえにくくなってしまった。

「ふむ、アスハの娘も、なかなか言うではないか。ウズミの様に理想ばかり言うようでは、オーブの次代が困ると思っていたが」

え？振り向くとそこには、ギナ様に似た黒い長髪の女性がいた。

「弟とはもう顔を会わせていよう？ 私はロンド・ミナ・サハクだ」  
「あ、はい。それにしても本当にギナ様とそっくりですね」  
「ふふふ、秘密を教えてやるうか」  
「え？」

ミナ様は声を潜める。

「前髪の分け目を右側にしているのが私だ」  
「へ！？ あはは、そうなんですか！」  
「秘密だぞ」

そう言うとミナ様はウィンクして向こうへ行ってしまった。ミナ様、なかなかお茶目！

……扉が開いた。カガリが出てくる。

「ああ、疲れた。やっと終わったよ。首長たちはまだ別の案件で会議を続けるそうだ。タフだな」

「会議、どうなったの？」

「連合と同盟締結だ。しかし、お父様に悪いことしたな」

「ウズミ様、どうかなさったの？」

「私が見意見を言ったらさ、ほとんど大多数の首長がそれに同調して私に賛成する意見を言ったんだ。それで、最後は、『どうせ私は元代表だ。好きにしる』とすねちゃって」

「あらら」

「でも、不安なんだ。私の一言で国が大きく動いてしまうことが。連合と戦わなくてもすんでもザフトに攻められるかもしれない。結局国を焼いてしまうんじゃないか、お父様の方が正しいんじゃないかって」

「でも、私はカガリの言った事、間違っていないと思う。こんな世

界中を巻き込んだ戦いなら、中立ですと言って、それが通ると思わないもの。どうせ組むなら仲が良い方と組みたいな。ウズミ様とも、きつと仲直りできると思うわ」

「そうか、ありがとう。気が楽になった」

「でも、よかった。連合の人と戦わずにすんで。あたし、アークエンジェル行って来るね！みんな心配してたから」

「ああ、よろしく言うておいてくれ。ただ、まだよそには洩らすなよ。ザフトから攻められる」

アークエンジェルにはもう連絡が行っていたようで、ピリピリした空気が消えていた。

「いやー、連合がオーブ攻めることになったらどうしようって思ったよ」

「ふふ、そうだったら地球軍人のサイたちは拘束ね」

「やめてくれよー」

「そう言えばさ、キャリアーさんが中尉に昇進したんだ！」

「え？ほんと？やったね！今までずっと前線で戦っていたのに少尉だったんだから当然って言えば当然だけど。地球軍も色々変わろうとしてるのね」

その晩がお祝いになったのは言うまでもない。

「「「昇進おめでと〜」

昇進おめでと〜

昇進おめでと〜

「「「

みんなが歌う昇進の歌を聴いてキャリアーさんは照れくさそうに笑っていた。



## オーブ防衛戦

パナマ会戦の詳細な情報が入ってきた。パナマにも当然MSを含めた兵力を集めていたのだけど、強力なEMP兵器が使われていっせいにコンピュータ部分がやられて動かなくなってしまうたと言っただ。

モルゲンレーテ始めオーブの人たちは大わらわでマスドライバーや兵器にEMP対策を施している。

6月1日、中立を保つ赤道連合、スカンジナビア共和国、オーブ連合首長国等に対し、地球連合より「ワン・アース」アピールがされた。

もちろんオーブはもう裏で同盟を結んでいるのだけど、赤道連合が同盟を結んでくれればいいと思う。大洋州連合、そしてカーペンタリアからの圧力が減るからだ。

早く地球軍に来てほしいけど、パナマ敗北での打撃からなかなか立ち直れずオーブ派遣軍の編成が遅れているようだ。EMP対策もきつと同じように大わらわでやっているのだろう。

ある日モルゲンレーテから呼ばれた。レッドフレームの修理が完成したから様子を見てくれという。

「完璧に仕上げたつもりよ」

シモンズさんは修理の完了したレッドフレームの前で、胸をそらす。

「じゃあ、ちょっと試させてもらいますね」

あたしはレッドフレームのコクピットに入り込むとOSを立ち上げる。  
レッドフレームの左肘を二、三回曲げたり伸ばしたりさせると、左手首を一回転させ、左手を握らせ拳を作り、再び開かせる。そして人差し指から順に小指まで曲げていき、最後に親指を曲げて拳を作る。

全ての動作が壊れる前とまったく同じ反応速度だ。

「OKです!」

コクピットを出ながら、改修された二重装甲部分を見る。

「ここが、PS装甲かあ」

「正確には、その内側の装甲ね。外側の装甲が破られた時だけPS装甲化するから電力の消費も抑えられるのよ。ちょうど地球軍でも同じ発想の装甲が開発されてトランスフェイス装甲と言われているらしいわ。特許料を分捕れなくて残念!」

「でも、これで防御力上がって安心ですね!」

「過信はしないでね。着弾時の衝撃までは無効化する事ができないから。現に主任が、それで怪我したでしょう?」

「そうですね。気をつけます」

あたしは、これからもよろしくね、とレッドフレームをポンと叩いた。

とうとう、大西洋連邦の第4洋上艦隊が南下を開始した。アズラエルさんも陣頭指揮を執っているそうだ。

だが、カーペンタリアにも動きがあるらしい。アークエンジェルは

臨戦態勢に入った。民間人の避難誘導も始まった。

カガリの話では、赤道連合が地球連合側になり、カオシユンのマスドライバーとの連絡が取り辛くなったプラントからの圧力が強まっているらしい。もしかしたらオーブのマスドライバーを破壊しようとしているのかもしれない。

パナマでは、ザフトは条約を無視し、投降する兵士たちに発砲し虐殺したと言う。そんな奴らには絶対負けられない！

オーブ近海に近づいたザフト軍は、「地球軍の圧力と首長家の圧政に苦しめられているオーブ人民を救援するため」と言う建前でオーブ領海に進入しようとしていた。

オーブ海軍、そしてアークエンジェルも防衛のために出撃した。フラガさんやキャリーさん、シャムスさんは本土で防衛に当たっている。代わりにオーブ軍のM1アストレイが乗せられている。

連合艦隊がオーブに到着するまで一日！

とうとうザフト軍はディンを発進させ、オーブ領海に侵入してきた。

『合戦ようーい！』

イージス艦から一斉に艦対空ミサイルが発射される。これがオーブ防衛線の始まりだった。

更に戦闘ヘリ、VTOL戦闘機スピアヘッドが、そして空母からスカイグラスパーが発進する！

アークエンジェルからもスカイグラスパーが発進する。あたしとキラモレッドフレームとブルーフレームで出撃する！

戦闘機がディンをかく乱しながら下へ下へと追い込む。そこを下から突撃銃で撃つ！

アストレイも発進する。短距離飛行しかできない彼らは、イージス艦のヘリポートをうまく利用して飛び移りながら戦っている。

あたしも利用させてもらおう！ヘリポートを足場にハイジャンプ！周囲のデインに弾をばら撒く！幸いジンより装甲が薄い！あっけなくデインは墜ちて行く。

ひとしきりデインを駆逐した後補給に戻ると、悪い知らせが待っていた。

「ご苦労様。マストライバーのあるカグヤ島が危ないのよ。上陸されそうなの。ザフトは水中用MSもかなり投入しているみたいよ。ここは本艦とイージス艦、護衛艦と戦闘機で防空できるから、あなたたちはカグヤ島へ支援に向かって頂戴！」

「はい！」

やはりザフトの目的はマストライバーか！遠くから見るとザフトの攻撃がカグヤ島に集中しているのがわかる。

でもよかった。オーブ本島に攻撃がいなくて。民間人の被害も少ないだろう。

あたしたちは一旦オノゴロ島へ向かう。敵がいなくて幸い！付けられるだけ武装を付け、カグヤ島へ向かう。

島へ向かうと、ザフトの水中用MSとM1アストレイが激しく水際の攻防を繰り返していた。

「救援よ！空中から敵を掃射する！」

あたしたちはちょうど後ろから敵MSを撃つ事ができた。海岸沿いに飛び、一帯の敵MSを駆逐する。

それからあたしたちは、遊撃として救援に追われる事となった。なんか、アラスカみたいだ。アラスカで敗退したとは言えパナマに続きオーブ。ザフトの力は侮れない。

「空の悪魔め！お前らみんな許さねえ！お前らなんか！……ちつ弾切れか！」

「シャムスさん、落ち着いて！救援に来たわ！弾切れなら一旦戻って補給して！ここは任せて！」

「……了解！」

シャムスさんはカグヤ島の臨時防衛本部へ戻っていった。

なにしろ敵MSの数が多い。押されてトリケロスを使うのも一度や二度ではなかった。相手はマスドライバーを狙ってミサイルを撃ってくるのでその迎撃にも忙殺される。

……あ、あれはディン！ここまで防空線が後退して来たの！？  
だめかも知れない。そう思った時だった。

強力なビームがディン数機をなぎ払った！

あれは……機体照合……レイダーにカラミティが乗ってる！

「へへ、何遊んでんだよ、お前ら！」

カラミティが飛び降りる。大地に立つと、その圧倒的な火力をディンに向ける！レイダーはその鳥のようなMA形態のまま、ディンを駆逐していく。

やった！とうとう地球軍の増援が来た！

2機のMSに続いてスカイグラスパーの群れがやってきて制空権を確立する！

続いて輸送機がやってきてストライクダガーを次々に降ろしていく。カグヤ島の防備は完全になった。それを見て、とうとうザフトは撤退していった！

連合艦隊はオノゴロ島付近に停泊した。

アークエンジェルもこちらへ戻ってくるそうだ。あたしたちも一旦オノゴロ島へ戻る。

連合艦隊には、アークエンジェルにそっくりな色違いの黒色の艦も混じっていた。その艦からヘリが飛んで来た。

あ、あれはアズラエルさん！

ホムラ代表と、続いてモルゲンレーテから出てきたアスカさんと握手してる。

あたしたちがMSを降りるとこっちに歩いてきた。

「初めましてと言うべきかお久しぶりと言うべきか。頑張ってくれてるようですね。ルナマリアさん、キラ君」

「は、はい、おかげさまで」

「危なかったようですね。僕も艦隊を急がせた甲斐がありましたよ」  
そう言うとアズラエルさんは笑った。

翌日、ささやかなパーティが開かれた。

まだ戦闘の爪跡もあちこちに残っているのだけど、オーブと連合の紐帯を深めるためには必要な儀式なのだろう。

あたしたちも呼ばれたので、この間カガリの誕生日パーティに使ったドレスを着ていった。

カガリは、アークエンジェル級の二番艦ドミニオンの艦長だと言う

ロベルト・ゴメスさんと、気が合ったのか話し込んでいる。

「やあ、ルナマリアさん。ここにいましたか」

「あ、アズラエルさん。……結構飲んでますね」

「パーティでは飲むのも仕事の内ですよ。でも、さすがに風に当たりたくありませんか？」

「あ、はい」

あたしは、アズラエルさんとベランダに行った。

「いい風ですね」

「はい」

「僕はね、コーデイネイターが嫌いです。憎んでいると言ってもいい」

唐突にアズラエルさんが言った。

「……」

「訳を知りたいですか」

アズラエルさんが、何かを吐き出したがっているのはわかった。

「……はい」

「僕がハイ・スクールの時です。仲の良い年下の女の子がいました」

「物心ついてからこっち　僕には楽しい思い出なんてひとつもなかった。家族の愛情も、心を預けられる友達も。そう、あの子に出会うまでは。僕の窓を開いて、外には眩しい光の世界があることを教えてくれたのは、あの子、エリスでした。花の中で笑ってたあの子……。『一緒に生きよう』と、初めて僕に言ってくれたあの子。」

人の温もりと愛情を、惜しみなく与えてくれたあの子。幸せってヤツを、ようやく手に入れたと思いました。他には何も要らなかつた。なのに、彼女は逝ってしまいました。僕に何も言わずに。ひとりで高い塔の上から飛び降りて。原因がわかつたのは数日後でした。彼女はコーディネイターの男に乱暴されていたんです。日記に書かれていました。もう僕とは一緒にいられないと……加害者の男はさつさとプラントへ逃げ出した後でした。罪に問おうにも、優秀なコーディネイターの弁護士が無罪にしまいました。」

「……」

「……悔しかつた。憎みましたよ、コーディネイターを。皆殺しにしてやりたかつた。なのに、何故。これは運命の悪い悪戯なのか？突然目の前に現れた君は、なぜそんなにエリスに似ているんです？瞳の色も、口元も、声さえも。」

「……アズラエルさん……」

「……失礼。酔いすぎて埒もない事を言ってしまったようです。忘れてください」

そう言うと、アズラエルさんはパーティの中へ戻っていった。

「お姉ちゃん！ここにいたの？……どうしたの？なにかあつたの？」

「なんでもない」

あたしは涙をぬぐつた。

翌日から、あたしたちは出撃の準備に追われることになった。いよいよザフトを地球から追い出すのだ。

MSも改修に入っている。

レッドフレーム・ブルーフレームビームサーベルの位置を調整して、

フライトユニットを付けていても使えるようにした。キラにはすぐ便利になったと思う。更に、ブルーフレームにビームシールドが付けられた。

ストライクは近接戦闘用にビームサーベルを本体に増設した。

バスターは修理した。これもやはり近接戦闘用にビームサーベルを本体に増設して、サイトとツールがとりあえずパイロットの訓練をしている。

……シモンズさんがひどくあわてている。アスカさんも？なんだろう？

「どうしたんですか？あ、ラゴウヘッド！」

「そうだよ、ルナちゃん。これに、驚くべき情報が入っていたんだ！」

なにになに？画面に情報が出ている。MS？

「ドレッドノート……ニュートロンジャマーキャンセル搭載？核動力！？」

「そうだよ！ほかにも量子通信を利用したドラゴンシステムとか面白い物もあるが、とにかく一番重要なのはニュートロンジャマーキャンセルだ！その設計図が入っている！」

「へーすごい」

「これで特許料、連合からたっぷり分捕れますよ、主任！」

「特許料……」

「お金は大切なよ、ルナちゃん」

「そうだ、大切だ。それにエネルギー不足に苦しむ地球にとっては福音となるだろう。さっそくホムラ代表と話していくぐらいで売りつけるか相談しよう」

アスカさんは嬉しそうにそそくさと出て行った。

「そうそう、これ。レッドフレームで使えるようにしておいたわ。敵陣に切り込む時に使って頂戴。ビームサーベルよりおもしろいわよお」

「へ!？」

「ただ置いておいてもつまらないから改造してみたのよ。その過程でなにか重要なデータが入ってるってわかったんだけどね。内側の取っ手を手で握ればコネクトできて、ビームサーベル使えるようになるから」

「あー、でも大抵、左腕には突撃銃握って出撃しますし……」

「残念ねえ。まあ、最初から切り込むこともあるだろうから、持ってたって」

「はぁ……」

ほんとに技術者ってのは、妙なことを考えるものだ。苦笑。

## ジブラルタル攻略

ビクトリアが奪還されたそうだ！マストライバーも無事で！  
歓喜に沸き立つアークエンジェル。

いよいよアークエンジェルも出撃するのだ。目指すはジブラルタル！  
不思議だな。アフリカからオーブに来る時はあんなに苦労したのに。  
あたしたちは、赤道連合の領域を通りながら、ひとまずスエズ基地  
を目指す。

「あ、ほらイルカだ」

「ほんとだ！かわいー！」

「しかし、こんなにのんびりしちゃっていいのかな」

「カーペンタリアのザフトも、オーブで力使っちゃったしね」

「いいんじゃない？どうせジブラルタルに着けば戦闘だし。命の洗  
濯ってね」

「こんな大艦隊じゃ、ザフトも攻めようとは思わないでしょ」

「ははは。ほんと。俺たちよくアークエンジェル一艦で通り抜けた  
なあ」

……！艦隊に動きがあった！何隻からか一斉にアスロックが発射さ  
れる。地球軍の水中MSも出撃してみたいた。  
ほどなく、敵潜水母艦およびMS撃破の報告が入った。

スエズでユーラシアの黒海艦隊と地中海艦隊と合流した。  
お偉いさんは今後の打ち合わせをしている。

あたしたちは交代で基地に降りる事にした。

「うーん。ちょっと足を伸ばせばピラミッド見れるのにな」

「まあ戦闘行動中に無理でしょ、メイリン。あたしも見たいけど」

「でもさすがスエズ基地。PXや食堂も充実してるね」

「ちよつと昼飯に行こうか」

「うん」

食堂にはエジプト料理もあった。

「ケバブかあ。懐かしいな」

「お、それおいしいの？」

「あ、サイ、うん、おいしかったよ。ヨーグルトソースがお勧め！」

「じゃ、それひとつずつ。あとハト料理も頼もう」

バルトフェルドさん、元気でやってるかな。

嬉しい事があった。

娯楽施設にプールバーがあったのだけど、それまであまり口を開かなかったシャムスさんが、行こうと言い出したのだ。

シャムスさんは楽しげにあたしたちにビリヤードについて講釈してくれた。

それからみんなで実際に遊んでみた。楽しかった。シャムスさんとの距離もまた少し縮まった気がした。

あたしたちがジブラルタル近海へ近づいた時、すでに作戦は始まっていた。ユーラシアの大軍がピレネーを越え、

イベリア半島を連合の手に取り戻そうとしていた。

「サイ、そう言えば、あたしたちって、いつも防衛戦ばかりだったね」

「そう言えばそうだな。今回は初めて攻める側か」

「武者震いがするよ」

「無茶しないでよ、トール。油断した時が一番危ないんだからね」

「わかってるって、ミリィ」

すでに前衛部隊が、敵の水中MSと戦っているみたいだ。地球軍はこの戦いにフォビドウン・ブルー、ディープ・フォビドウンと言う水中MSを投入しているみたいだ。

敵はデインを展開し始めた。こちらスカイグラスパーが発艦して行く。

こちらの艦隊がじわじわと押していく。

とうとう、ジブラルタル基地が見えた！

あたしとキラは出撃した。だけどジブラルタル基地に足を降ろした時、そこはすでに地球軍の物だった。

ザフトの輸送機が飛び立って行ったのがかすかに見える。彼らはこの基地を放棄したのだ。

「見やがれ！ザフトの野郎ども！お前らなんて皆殺しだ！」

！手を上げているザフト兵にストライクダガーが銃撃しようとしている！

「おやめなさい！あなたたち！降伏した者を撃つとは、それでも地球軍ですか！」

「げ！オーブの赤髪のディアナに戦慄のブルーかよ。し、しかしこ

いつら、パナマで降伏した仲間を虐殺しやがったんですぜ！」

「気持ちわかります。でも、相手がやったからと言ってこちらもやるのでは、わざわざお互い様にさせてあげてしまっただけです。こちらが暗黒面に落ちてはいけません！」

「……わかりましたよ。……ちっ同じコーデイだからかばってんじやねえのか？（ぼそ）」

「今なんと言った！」

「なんでもありやせんよ」

ストライクダガーは去って行った。

それからあたしたちは降伏したザフト兵に暴行を加えようとする者がいないか、飛び回って制止した。

「キラ、くやしいよ」

「うん。でも、こういう事は時間がかかるし。しょうがないよ」

あたしたちがアークエンジェルに戻ると、サイとツールも防空任務から戻っていた。

「なんていうのかねえ。これが時の勢いって奴？」

「ほんと。ただ、ジブラルタルに来ただけって感じ。あたしたち、戦闘もしなかったのよ？」

「うん、僕たちいらなかったよね」

「ご苦労だったな、みんな。まあ、地球軍と一緒にオーブ軍が誇るアークエンジェルが参加した、と言うところに意味があるのではないか？上の方の考えとしては」

「なるほどねー」

「来ただけで意味があっただな。戦力的なことじゃなくて」

あたしたちはナタルさんの考えに感心した。さすがだな、と思う。



## ジブラルタル攻略

ビクトリアが奪還されたそうだ！マストライバーも無事で！  
歓喜に沸き立つアークエンジェル。

いよいよアークエンジェルも出撃するのだ。目指すはジブラルタル！  
不思議だな。アフリカからオーブに来る時はあんなに苦労したのに。  
あたしたちは、赤道連合の領域を通りながら、ひとまずスエズ基地  
を目指す。

「あ、ほらイルカだ」

「ほんとだ！かわいー！」

「しかし、こんなにのんびりしちゃっていいのかな」

「カーペンタリアのザフトも、オーブで力使っちゃったしね」

「いいんじゃない？どうせジブラルタルに着けば戦闘だし。命の洗  
濯ってね」

「こんな大艦隊じゃ、ザフトも攻めようとは思わないでしょ」

「ははは。ほんと。俺たちよくアークエンジェル一艦で通り抜けた  
なあ」

……！艦隊に動きがあった！何隻からか一斉にアスロックが発射さ  
れる。地球軍の水中MSも出撃してみたいた。  
ほどなく、敵潜水母艦およびMS撃破の報告が入った。

スエズでユーラシアの黒海艦隊と地中海艦隊と合流した。  
お偉いさんは今後の打ち合わせをしている。

あたしたちは交代で基地に降りる事にした。

「うーん。ちょっと足を伸ばせばピラミッド見れるのにな」

「まあ戦闘行動中に無理でしょ、メイリン。あたしも見たいけど」

「でもさすがスエズ基地。PXや食堂も充実してるね」

「ちよつと昼飯に行こうか」

「うん」

食堂にはエジプト料理もあった。

「ケバブかあ。懐かしいな」

「お、それおいしいの？」

「あ、サイ、うん、おいしかったよ。ヨーグルトソースがお勧め！」

「じゃ、それひとつずつ。あとハト料理も頼もう」

バルトフェルドさん、元気でやってるかな。

嬉しい事があった。

娯楽施設にプールバーがあったのだけど、それまであまり口を開かなかつたシャムスさんが、行こうと言い出したのだ。

シャムスさんは楽しげにあたしたちにビリヤードについて講釈してくれた。

それからみんなで実際に遊んでみた。楽しかった。シャムスさんとの距離もまた少し縮まった気がした。

あたしたちがジブラルタル近海へ近づいた時、すでに作戦は始まっていた。ユーラシアの大軍がピレネーを越え、

イベリア半島を連合の手に取り戻そうとしていた。

「サイ、そう言えば、あたしたちって、いつも防衛戦ばかりだったね」

「そう言えばそうだな。今回は初めて攻める側か」

「武者震いがするよ」

「無茶しないでよ、トール。油断した時が一番危ないんだからね」

「わかってるって、ミリィ」

すでに前衛部隊が、敵の水中MSと戦っているみたいだ。地球軍はこの戦いにフォビドウン・ブルー、ディープ・フォビドウンと言う水中MSを投入しているみたいだ。

敵はデインを展開し始めた。こちらスカイグラスパーが発艦して行く。

こちらの艦隊がじわじわと押していく。

とうとう、ジブラルタル基地が見えた！

あたしとキラは出撃した。だけどジブラルタル基地に足を降ろした時、そこはすでに地球軍の物だった。

ザフトの輸送機が飛び立って行ったのがかすかに見える。彼らはこの基地を放棄したのだ。

「見やがれ！ザフトの野郎ども！お前らなんて皆殺しだ！」

！手を上げているザフト兵にストライクダガーが銃撃しようとしている！

「おやめなさい！あなたたち！降伏した者を撃つとは、それでも地球軍ですか！」

「げ！オーブの赤髪のディアナに戦慄のブルーかよ。し、しかしこ

いつら、パナマで降伏した仲間を虐殺しやがったんですぜ！」

「気持ちわかります。でも、相手がやったからと言ってこちらもやるのでは、わざわざお互い様にさせてあげてしまっただけです。こちらが暗黒面に落ちてはいけません！」

「……わかりましたよ。……ちっ同じコーデイだからかばってんじやねえのか？（ぼそ）」

「今なんと言った！」

「なんでもありませんよ」

ストライクダガーは去って行った。

それからあたしたちは降伏したザフト兵に暴行を加えようとする者がいないか、飛び回って制止した。

「キラ、くやしいよ」

「うん。でも、こういう事は時間がかかるし。しょうがないよ」

あたしたちがアークエンジェルに戻ると、サイとツールも防空任務から戻っていた。

「なんていうのかねえ。これが時の勢いって奴？」

「ほんと。ただ、ジブラルタルに来ただけって感じ。あたしたち、戦闘もしなかったのよ？」

「うん、僕たちいらなかったよね」

「ご苦労だったな、みんな。まあ、地球軍と一緒にオーブ軍が誇るアークエンジェルが参加した、と言うところに意味があるのではないか？上の方の考えとしては」

「なるほどねー」

「来ただけで意味があっただな。戦力的なことじゃなくて」

あたしたちはナタルさんの考えに感心した。さすがだな、と思う。



## 宇宙へくボアズ攻略戦

あたしたちはそれからオーブに帰り、宇宙に上がる準備をしていた。カーペンタリアは無理攻めせずカオシユンとの連絡を妨害するに留めておくそうだ。

カラミティが一機、ビームサーベルを搭載される改造をされて、まわされてきた。

みんなで話し合って、カラミティはシャムスさんが乗ることになった。射撃、うまいものね。

スカイグラスパーがコスモグラスパーと交換される。

ビームガンバレルストライカーは量子通信機の実用化に伴い無線式に変更された。

キャリーさんの105ダガーには、I・W・S・P・  
統合兵装  
ストライカーパックが届けられた。兵装と制御用電装系の重装備化による消費電力の増加の為、作動時間が大幅に短縮すると言っ問題をクリアできず、一旦は採用は見送られた物なだけ……それがクリアされたのだ。

レッドフレームとブルーフレームのフライトユニットは改造されて宇宙でも使える物になった。

更に！アークエンジンに乗るMSはモルゲンレーテでかなり大掛かりな改造をされた。なんと、NJCを組み込まれて核動力になったのだ！

いよいよ宇宙に上がるのも間もないある日、フレイが訪ねて来た。

「みんな！元気にやってる？」

「おー！フレイも元気だった？」

「わあ、フレイ！大学は順調？」

「うーん、それがねえ」

どうしたんだろう。フレイは何か悩んでいるようだ。

「最近、外交官もいいかなあって思いだしたのよ。戦争を避けて平和を作る仕事でしょう？とても大切ないい仕事だと思うの。迷っちゃって」

「まあ、若いんだからすぐに決めなきゃいけないものでもないしね」「うん、いっぱい迷って、考えるといいよ。フレイは偉いな。俺はこのままなし崩しに軍人になっちゃいそうだよ。ははは」

「ありがとう。ところで、これから話すこと絶対に内緒よ」

フレイは声を潜めた。

「パパと、プラントのアマルフィ議員のルートで、講和の話が進められているのよ。オーブ、ビクトリアにジブラルタルと敗北続きでザラ派の勢力も鈍っているんですって。もしこれ以上プラントが敗北重なるようなら、穏健派が主導権握るかも知れないの。シーゲル・クラインはエイプリル・フル・クライシス引き起こしたから、穏健派のトップはアイリーン・カーナバになりそうだけど。」

「へえ、そんな話が進んでいるんだ」

「そうか、じゃあ、もうすぐ戦争も終わりかも知れないね」

「だからね、みんな。無理しちゃ、だめよ？」

「うん、わかった。ここで無理して死んだらあほらしいもんね」

フレイは、くれぐれも無理しちゃだめよ、と言って帰っていった。そうか。もうすぐこの戦争も終わるかもしれない。そして平和が来る。

絶対、死ねないな。

数日後。あたしたちはいよいよ再び宇宙へ上がる。

「……じゃあな。お前たち。絶対死ぬなよ」

「うん、カガリも元気で」

「まかしてよカガリ。帰ったらまたお祝いでもしよう」

「私も宇宙にみんなと一緒にいきたいが、今私がやらなきゃいけない事は他にあるからな」

「うん、カガリにはオーブをいい国にしてもらおう勉強をしてもらわなくっちゃ」

「まっただくだ。アズラエルとミナの交渉は見せたかったぞ。ニュートロンジャマーをこんなに取りついでいいのかって思うくらいの条件で売りつけた。まだまだ私にはあんな事はできん」

「いいのよ。交渉は専門家に任せれば。国の舵取りはまた別でしょう？」

「そうだな、ルナ。そう言う優秀な人材がどうすれば集まるか、オーブのために働いてくれるか、私は学びたい」

「カガリならできるよ。きっと。それにあたしはカガリのためなら喜んでオーブのために働いてもいいかなって思ってるし」

「そうそう。俺らも結構優秀な人材だよ！それを引き連れてるんだからさ」

「うん、僕もカガリの事好きだよ」

「あ、キラ、あ、ありがとう……絶対無事で帰って来いよな！」

「うん、約束する」  
「じゃあ、そろそろ私は降りなきゃな。戦争が終わったら絶対またみんなそろってお祝いするぞ！約束だぞ？用意して待ってるからな！」

カガリは艦を降りていった。絶対！みんなでお祝いしよう！

艦がブースターを取り付けられ、マスドライバーのレールを走り出す。決意とともに、あたしたちは宇宙へ向かった。

あたしたちはまずオーブの宇宙ステーション、アメノミハシラへ入港した。地球軍艦艇も集結している。

「おひさしぶりです、ギナ様」

「ふふふ、PO1は強力になったぞ！それにNJCで更に強力になった！ああ、君たちがザフトのMSを倒したことがきっかけらしいな。よくやった」

また、背中をばしばしやられた。

宇宙ステーションでの食事は、艦内で食べるより満足度が違う。やっぱり頻繁に新鮮な食材が入るせいだろう。

食堂で食事の後お茶していたら、キラに話しかけられた。

「ルナ、あのさあ。アズラエルさんは、もし連合の勝利で戦争が終わったら、新たなコーディネイトは禁止するって言ってたじゃない？ルナはそれについてどう思う？」

「いいんじゃない？あたしんちは、コーディネイターはナチュラルに還って行くべきだって考えだから。その点はブルーコスモスの穏健派もプラントの穏健派も同じ意見よね。手を結べばよかったのに、シーゲル・クラインはなにをとち狂ったんだか」

「そうか。僕は第一世代だからさ。複雑な気持ちだよ。僕の両親は何か想いがあるって僕をコーディネイトしたんだ。それを無にするのも悪いかかって」

「でも、コーディネイターは安定した新たな種などではないってシ

「ゲル・クラインは言つてたけど、その通りじゃない？例えばプラントって、婚姻統制なんかしちゃつてもさ、出生率がた落ちで。その点あたしたち姉妹はコーディネイトされずに別に妊娠治療もせず自然に生まれて来たし、アスカさんちの兄妹もそうだって。やっぱり自然が一番なのよ。うん」

「それは、そうかも知れない。確かに」

「まあ、結婚するならどうしてもナチュラルと、なんて思つてるわけじゃないのよ？好きになつた人がコーディネイターなら、その人と一緒になると思う。そうやって、世代を重ねて、自然にナチュラルに還つて行けばいいと思う。無理に還そうと思うとまた無理が出るし」

「そうだね。僕をコーディネイトしてくれた両親の気持ちは気持ちでありがたく受け取る。また別の話だよ」

キラは、吹っ切れた顔でお礼を言つて去つて行つた。

月基地では、懐かしい人に会つた。ハルバートン少将だ。

「君たちの活躍は宇宙から聞いていて嬉しく思っていたよ。」

「ありがとうございます！」

「この戦争ももう一押しで終わる。よろしく頼むぞ！」

「はい！」

ザフトは月の地球軍基地の正面に二つの宇宙要塞を築いている。手前からボアズ、ヤキン・ドゥーエだ。

ボアズを落とした時点で、プラントに何らかの動きがあるんじゃないかとあたしは期待している。

いよいよ出撃命令が降った！地球軍は第6〜第8機動艦隊をこの戦いに投入する。

この攻略戦に、地球軍はある策を用意していた。デブリ帯の大きなデブリにDSSD（深宇宙探査開発機構）から技術提供させたウォッチュール・リュミエールを取り付け、太陽風により加速させボアズにぶつけると言うものだ。

あたしたちがボアズの前面に進出した時には、デブリ群のボアズへの着弾が始まっていた。ボアズの守備隊はデブリ群への対応に追われている。あたしたちは実質奇襲に成功したのだ！

総指揮官、第6艦隊のアンデルセン中将が全軍に檄を飛ばす。

『さあ、デブリ攻撃でもたついている奴らを横合いから思い切り殴りつけてやれ！ 空の悪魔どもに我らの神罰の味をかみしめさせてやれ！』

「「「おーーーーー！！！！」」」

敵MSがない艦隊正面。艦砲射撃が雨霰のようにボアズに降り注ぎ、敵の対空陣地を破壊していく。

『さあ、掃除は完了した！ 進め！進め！ 勝利の女神はお前らに下着をちらつかせているぞ！』

艦隊から次々とこちらのMSが発進していく。

あたしも！

「ルナマリア・ホーク、レッドフレーム行きます！」

MSを発進させた艦隊は、デブリ群への迎撃に向かっているザフト艦隊へその攻撃の矛先を向ける。

あわててデブリ群の迎撃から戻って来ようとする敵MS。それをシヤムスさんのカラミティ、サイのバスター、トールのバスターダガーが長距離射撃で叩く！あたしとキラとフラガさんが中距離から、キャリアさんが近距離から止めを刺していく。

『Nフィールドに取り付きました！』

あたしたちも取り付いた！敵MSが出てくる入り口をキャリアさんがレールガンとガトリング砲で掃射する！

キャリアさん、あたしとキラは入り口から中に入っていく。

ビームライフム！とっさにシールドで防ぐ。敵の新型？（後で知ったがゲイツと言ったらしい）がビームライフルを撃ってくる。とうとうザフトもビームライフルを採用したのね。

あたしとキラがシールドを盾に相手を牽制する。あたしたちの後ろからキャリアさんが105mm単装砲とガトリング砲で敵を排除する。

そうやって、あたしたちは奥へ奥へと進んでいった。

突然、広い空間に出た。横の壁には大きなガラス張りの部屋がある！ここが指揮所！？

『降伏せよ』

信号を送る。……どうやら指揮所だったようだ。外で続いている戦

闘も散発的になって行き、やがて、止んだ。

ボアズは落ちた。

ボアズが落ちて翌日、ザフトで政変があったらしい！ザラ議長が解任され、アイリーン・カナーバが臨時議長になったようだ。彼女は講和を打診してきた。

こちらの要求は「旧に復する事」だった。プラントに甘いとも言える条件だ。戦前より若干の自治の拡大も認められている。

プラントの独立を認めない代わりに、エイプリールフル・クライシスにおける中立国の被害は、プラント理事国が面倒を見ることになる。

唯一、連合が罪に問うた人物は、シーゲル・クラインだった。中立国までも巻き込んだNJの地球への投下が非難され、終身刑になる模様だ。

プラントはその条件を受け入れた。

講和条約を結ぶために、ザフトの艦隊に守られ、アイリーン・カナーバが来る。地球連合からも再編なった第3艦隊に守られオルバーニ地球連合理事総長が来る。

ボアズからほど近い位置で両者は会合した。

あたしたち第6、第8艦隊は引き続きボアズに駐留していた。

「今頃、講和条約調印してるだろうね」

「うん、うまくいくといいな」

「これで、戦争も終わりか。よかったよかった」

「なに、あれ？」

突然巨大な光が、調印場所の宙域を貫いた

## 終末の光

「いったい何が起こったの!？」

にわかに騒がしくなるブリッジ。

オルバーニ地球連合理事総長とも、プラントのアイリーン・カナバとも連絡が取れない! 第3艦隊とも連絡が取れない!

かなり時間がたって、ぼつぼつ入り始めた情報では、ヤキン・ドゥーエ方面から何かの攻撃を受けて、第3艦隊の半数以上が撃沈破されたと言う物だった。

プラントからは更に悪い情報が入ってきた。ザラ派が決起し、ヤキン・ドゥーエを占拠したと言うのだ。そしてそこにはジェネシスと言う巨大なガンマ線レーザー砲があると

ザフト側と緊急に会談が持たれ、協力してヤキン・ドゥーエのザラ派を鎮圧する事が決定される。

第6、第8艦隊はボアズに留守部隊も残さずヤキン・ドゥーエに進撃する!

そこに、パトリック・ザラの演説が全宙域に向けて発信された。

『起ち上がれ、雄雄しき国土

起って、死闘を戦い抜かん

気高き怒りよ

怒涛の如く沸騰せよ

我らは人民の戦争に赴くもの

聖なるその戦に……」

プラントの国歌が流れる。

『プラント市民よ！軟弱なクライン派に騙されてはならぬ！新たな未来、創世の光は我等と共にある。この光と共に今日という日を、我等新たな人類のコーディネーターが、輝かしく歴史の始まりの日とするのだ！ 思い知るがいいナチュラル共。この一撃が我等コーディネーターの創世の光と成らんことを！ジェネシス発射！』

ヤキン・ドゥーエからまた新たな光が発せられ 月面のプロレマ  
イオス基地との通信が途絶えた。

ザラ派とザフト軍の艦隊が混じってわけわからない！  
あたしたちとザフト軍は、ザラ派の艦隊は地球軍に任せてジェネシ  
ス破壊に向かう！

「これ以上あれを撃たせてはなりません！」

「ああ、艦長。矛先が地球に向いたら終わりだぞ！」

「ローエン格林、一番二番撃てー！」

……

「……なに？陽電子砲が効かないだと！？」

「こうなったらMSで内部を制圧するしかない！」

「じゃあ、ちよつと行つてくらあ、艦長」

「……気をつけて。フラガ少佐」

「みんな。これを最後にしましょう」

「ああ」

「じゃあ、また後で！」

あたしたちはジェネシス破壊 最後の戦いに向かった。

……

六枚の羽を持ったMSを先頭としたMS隊が近づいてきた。

「おい！足つきのMS隊！こちらザフトのイザーク・ジュール。ジュール隊だ。お前らと組むのは複雑だが、頼む

ぞ！」

「足つき？……アークエンジェルの事か？了解！案内よろしく頼む  
！」

あたしたちがヤキン・ドゥーエに近づいていくと、鬼人のような勢いでMSを撃破している、赤いMSを中心とする一群のMS隊があった。

「ユニウスセブンで無惨に散った命の嘆き忘れ、討った者等と何故偽りの世界で笑うか！貴様等は！何故気付かぬかッ！我等コーデイナーにとってパトリック・ザラの執る道こそが唯一正しきものと！」

「待て、サトー。フリーダム、と言うことはイザークか」

「お前、アスラン・ザラか！？貴様こんなところでなにをしている  
！？」

イザークさんが呼びかける。

「イザーク。我らが正義が必ずしも正義でないと知った時、兵士はどうすべきか？それでも正義に従うか、新たな道を探すか。どちらも、良心を裏切らねばできないだろう。君たちは新たな道を選んだか。だが俺の選択を間違いと断じる権利もないだろう」

「アスランか！？」

キラも呼びかける。

「アスラン、君がやろうとしている事をわかっているのか！？ザラ議長は、レノアさんを亡くされて、壊れてしまったんだよ！彼女を奪った世界を道連れにしようとしている。それがわからない君じゃないだろう！」

「俺がたった一人の肉親なんだ……！誰も傍にいない終わりは、寂しすぎる。できるものなら、お前たちが止めてみせる！」

そう言うと赤いMSはこちらに向かって攻撃してきた！

「……このパワー！もしかして核動力か！？」

キヤリーさんが言う。核動力？あたしたちと同じ？

「イザークさんたち！先へ行ってヤキンのコントロールを止めて！ここはあたしたちに任せて！」

「……わかった！やられるなよ？」

イザークさんたちは去って行った。

「その機体は知っている。お前らか。地球軍に味方するというコー  
ディネーターは」

アスランさんが恨みを含んだ声で言う。

「行くぞ！」

## ラスト・バトル

キャリーさんが撃ち合い、打ち合う。

「くっ、こいつP.S装甲だ！私には分が悪い。すまんが頼む！私は他のMSを！」

「わかりました！」

105ダガーのI・W・S・P・統合兵装ストライカーパックは実弾兵器が主だ。剣も実体剣。しかたがない。

「お前らなんか！」

シヤムスさんがカラミティの大火力で連射する。しかしシールドで防がれる！

！一気に切り込んで来られた！とつさにトリケロスで防ぐ！…  
…しまったな。防いでいると、ビームで攻撃ができない。突撃銃で相手のメインカメラに連射して距離を取る。

「冷静になれ！距離を取って牽制射撃を続ける！さあ、ザラ家の御曹司さんよ、エンデュミオンの鷹の怖さを見せてやるぜ」

フラガさん！ストライクがドラグーンを射出する。オールレンジ攻撃！

フラガさんが赤いMSを引き付けている間に他のMSを！

あたしとキラとキャリーさんは他のMSを駆逐していく。

「裏切り者めが！なぜプラントを裏切るか！」

答える言葉はあたしにはない。相手のビームサーベルにトリケロスを叩きつけるとそのままコクピットへビームライフルをぶち込んだ。

……

すごい相手だ、と思わざるを得ない。オールレンジ攻撃で牽制されていて、すでにたった一機になっても、バスターやバスターダガーすべての射撃が集中しても、赤い敵MSはフラガさんのオールレンジ攻撃を避け続ける！

防ぐだけじゃない！いきなり動きが変わる！赤いMSは背部のブースターユニットを切り離してブルーフレームにぶつけると、その隙を逃さずブルーフレームの左腕を切り飛ばす！あわててキラは距離を取る。

更に赤いMSはビームブーメランを飛ばしてキラとあたしを牽制すると、一気に切り込んできて、バスターもバスターダガーも片腕をガンランチャーと大型ビームライフルごと切り飛ばされる！

「くっそー！死ね死ねー！」

カラミティが撃ちながら突っ込んでいく！

「やめて！シャムスさん！」

あたしはとつさに敵に突っ込んでいた。

敵はシールドでシャムスさんの射撃を押し返す！カラミティが手に持ったプラズマバスター力が持っている手ごと吹き飛ばす！レッドフレームの左腕が切り飛ばされ突撃銃が爆発する！

レッドフレームは赤いMSと一瞬抱き合う様な形になる。とっさにトリケロスの先を相手の頭に押し付け、ビームライフルとランサーダートをすべて放ち、反動で上に移動し距離を取る！一瞬遅くレッドフレームの足をビームサーベルが薙ぐ！

「見えた！」

フラガさんのオールレンジ攻撃がとうとう敵を捕らえた。動きが止まる赤いMS。この時とばかり、サイモトルも残った片手でビーム砲とリニアガンを撃ちこみまくる！

……赤いMSは爆散した。

「アスラン、月のコペルニクスでさ、幼年学校で親友だったんだ……」

キラが泣いている。

イザークさんが戻ってきた！どうしたんだろう。彼のMSはぼろぼろだ。それに、2機しかない。

「どうした。アスランは……やったか？」

「ええ」

「そうか。莫迦な奴だよ！アスランも！クルーゼ隊長も！」

「クルーゼ？ラウ・ル・クルーゼか？お前さんがやったのか？」

「……ああ。ジュール隊ほとんどやられたがな。ほんとに莫迦な奴らだ！」

イザークさんが泣いている。

「そうだ！ヤキンのコントロールは？潰せたの？」

「　　！ザラ元議長は死亡したが、ヤキンはもうすぐ自爆する。ジエネシスの発射はヤキンの自爆と連動している！」

「そっか……」

「もう打つ手なしか？」

「人類絶滅！そんなのやだよ！」

……

「ねえ、あたし、ジエネシスの内部でレッドフレーム自爆させようと思うの」

「ええ！？」

「なんたつて核動力なんだし、核ミサイル一発分くらいの威力はあると思うのよ！」

「よし！そうしよう！この際だ、ブルーフレーム、バスターにバスターダガー、カラミティも自爆させるぞ。それだけやればジエネシスも壊れるだろう。脱出用MSは105ダガーとストライクだ」

フラガさんがまとめてくれた。

「その手があつたか！俺も混ぜろ！このフリーダムも核動力だ！どうせもうぼろぼろだし」

イザークさんも言う。

「じゃあ、急ぎましよう！」

あたしたちはイザークに先導されてジエネシスの内部に到達した。

急いでMSの自爆シークエンスを起動させる。そしてストライクと105ダガーに乗り移り、全速力で離脱する！

今までありがとうございました。そしてみなさん、フレーム！

## 最終話 終わらない明日へ

あれから3年が経った。

あの戦いから3日後、フレイのお父さんとニコルのお父さんが終戦協定に調印し、戦いは終わった。二人ともしつかり握手していた。ニコルはプラントへ戻った。でもフレイとは遠距離恋愛を続けるようだ。

恋愛と言えば、キラとカガリは不器用ながらも付き合い始めたようだ。うまく行けばいいと思う。

あたしたちとは言えば、本土の大学へ編入した。同じような工科大学だ。すっかりゼミの後輩への指導を任せられて忙しい日々を送っている。アスカさんちのシン君が後輩になった。

キャリアさんは、軍を退役した。工学博士に戻ったのだ。実は、オリーブの大学に迎えられて、あたしたちの担当教授だったりする。

マリューさんとフラガさんは結婚した。ナタルさんは複雑そうだった。でも、ナタルさんならきつといい人が見つかると思う。

シヤムスさんは軍にいる。終戦後も世界中のごたごたで忙しい日々を送っているだろう。別れ際いつか同窓会でもやろうと言ってくれた。

バルトフェルドさんは、地球連合のプラント警備隊の司令官となった。もともとクライン派と言っ事だし、連合側が配慮したのだろう。彼からは時々コーヒーが届く。

アズラエルさんは、忙しそうに世界中を飛び回っているみたいだ。オーブにも時々寄る事がある。その時はあたしのところにも顔を出してくれる。

ヤキン・ドゥーエ動乱と呼ばれるようになった、あの戦いの後、地球連合とプラントが講和したからと言って世界はゲームみたいには平和にならなかった。全世界を巻き込んだ戦争が終わったせいで却って小さな紛争が目立ってきている。その紛争を平和を破る悪だとは、あたしには単純に決められない。

南アメリカ合衆国では、大西洋連合の傀儡政権がクーデターで倒され、そして大西洋連合の介入でクーデター政権は瓦解し、また親大西洋連合の政権ができています。

プラントも、戦後プラントに大量移民したナチュラルと、元からの住人との間で争いも度々だと言う。

ユーラシア連邦は西部と東部の対立が激化している。更に、汎ムスリム会議との勢力圏争いも発生している。

東アジア共和国では、各地で独立紛争が激しくなりつつある。

アフリカでも、再び北部と南部の争いが始まった。

一貫して中立を保ったスカンジナビア王国もノルウェー王党派とスウェーデン王党派、共和派の争いが深まりつつある。

ヤキン・ドゥーエ動乱で成立した一勢力　ジャンク屋組合は動乱終結後、その権利を地球連合から否定され、消滅した。組合員は、主に連合を顧客とするデブリ回収業者になるか、海賊になるか、廃業するか三者に分かれた。

あの戦いであたしが学んだことは、平和なんてものは努力しなければすぐにひっくり返される、不安定な物だという事だ。

人間ができる事なんてちっぽけなもので。あたしが願っていたのは、家族と仲間とオーブの平安。それに寄与できた事をあたしは誇りに思う。もし、彼らの平安が侵されるなら、あたしはまた赤髪のディアナに戻ってでも戦うことを厭いはしない。最近、その対象が、増えた。あたしの左手の薬指にはピジョンブラッドのルビーの指輪が輝いている。7月の誕生石だ。意味は、「深い愛情」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8433o/>

---

赤髪のディアナ【完結】（ガンダムseed再構成）

2011年6月10日19時30分発行